

第8章

クンティ女王の祈り そしてパリークシットの救い

第1節

सूत उवाच

अथ ते सम्प्रेतानां स्वानामुदकमिच्छताम् ।
दातुं सकृष्णा ग्रायां पुरस्कृत्य ययुः स्त्रियः ॥ १ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

アタハ テー サンムパレーターナーンム
atha te samparetānām

スヴァーナーンム ウダカンム イच्छाターンム
svānām udakam icchatām

ダートウンム サクリシュナー ガンガーヤーンム
dātum sakṛṣṇā gaṅgāyām

プラスクリテヤ ヤユフ ストウリヤハ
puraskṛtya yayuḥ striyaḥ

sūtaḥ uvāca—スータが言った; *atha*—そのように; *te*—パーンダヴァたち;
samparetānām—死者の; *svānām*—親族の; *udakam*—水; *icchatām*—飲みたがっている;
dātum—与えるために; *sa-kṛṣṇāḥ*—ドウラウパディーと; *gaṅgāyām*—ガンジス川の;
puraskṛtya—先頭にして; *yayuḥ*—行った; *striyaḥ*—女性たち。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「そのあとパーンダヴァ兄弟は、故人の縁者たちが欲しがっている水を汲みに、ドウラウパディーとともにガンジス川に行った。女性たちが先頭を歩いた」

ヒन्दウ社会では、家族に不幸があったときにはガンジス川や神聖な川で沐浴する習慣がいまでもつづいています。肉親がガンジス川の水を容器に入れて死者に注ぎ、女性たちを先頭にして列を作って歩きます。5,000年前、パーンダヴァたちも同じ決まりに従っていました。主クリシュナはパーンダヴァたちのいとこだったことから、その行列に加わりました。

第2節

ते निनीयोदकं सर्वे विलप्य च भृशं पुनः ।
आप्लुता हरिपादाब्जरजःपूतसरिञ्जले ॥ २ ॥

テー ニニーヨーダカンム サルヴェー
te ninīyodakam sarve

ヴィラピヤ チャ ブフリシャンム プナハ
vilapya ca bhṛśam punaḥ

アープルター ハリ・パーダーブジャ・
āplutā hari-pādābja-

ラジャハ・プータ・サリジ・ジャレー
rajaḥ-pūta-sarij-jale

te—かれら全員; *ninīya*—捧げて; *udakam*—水; *sarve*—かれら全員; *vilapya*—嘆いて;
ca—そして; *bhṛśam*—十分に; *punaḥ*—ふたたび; *āplutāḥ*—沐浴した; *hari-pādābja*—主
の蓮華の御足; *rajaḥ*—埃; *pūta*—浄化されて; *sarit*—ガンジス川の; *jale*—水のなかで。

パーンダヴァたちは親族たちの死を悼み、主の蓮華の御足の埃と混ざって清められたガ
ンジス川の水を死者の体に十分にそそいだあと、みずからガンジス川に入って沐浴した。

第3節

तत्रासीनं कुरुपतिं धृतराष्ट्रं सहानुजम् ।
गान्धारी पुत्रशोकार्तां पृथां कृष्णां च माधवः ॥ ३ ॥

タトウラーシーナンム クル・パティンム
tatrāsīnam kuru-patim

ドウリタラーシュトウランム サハーヌジャンム
dhṛtarāṣṭram sahanujam

ガンダハーリーナム プトウラ・ショーカールターンム
gāndhārīm putra-śokārtām

プリタハーンム クリシュナーンム チャ マーダハヴァハ
prthām kṛṣṇām ca mādavaḥ

tatra—そこで; *āsīnam*—座っている; *kuru-patim*—クル家の王; *dhṛtarāṣṭram*—ドウ
リタラーシュトウラ; *saha-anujam*—弟たちと; *gāndhārīm*—ガンダーリー; *putra*—息
子; *śoka-artām*—死別にみまわれ; *prthām*—クンティー; *kṛṣṇām*—ドウラウパディー;
ca—もまた; *mādavaḥ*—主シュリー・クリシュナ。

そこで、クル家の王マハーラージャ・ユディシュティラは、弟たち、ドゥリタラーシュトウラ、ガンダーリー、クンティー、ドゥラウパディーたちとともに、悲しみに沈んで座った。

要旨解説

クルクシェートラの戦争は親族のあいだで起こり、その結果として苦しんだのは同族の人々、マハーラージャ・ユディシュティラ王、その兄弟たち、クンティー、ドゥラウパディー、スバドゥラー、ドゥリタラーシュトウラ、ガンダーリー、そしてガンダーリーの義理の娘たちでした。戦死したおもだった兵士たちも互いになんらかの関係があり、その親族たちもいっそうの悲しみにみまわれました。主クリシュナも、パーンダヴァ兄弟のいとしことして、クンティーの甥として、スバドゥラーの兄としてその場にいあわせました。そのため主は親族たち全員に等しく哀れみを感じ、かれらにふさわしい言葉をかけて慰めたのでした。

TEXT 4

सान्त्वयामास मुनिभिर्हतबन्धून् शुचार्पितान् ।
भूतेषु कालस्य गतिं दर्शयन्नप्रतिक्रियाम् ॥ ४ ॥

サーントウヴァヤーンム アーサ ムニビヒル
sāntvayām āsa munibhir

ハタ・バンドゥーン シュチャールピターン
hata-bandhūñ śucārpitān

ブフーテーシュ カーラッシャ ガティンム
bhūteṣu kālasya gatim

ダルシャヤン ナ プラティクリヤーンム
darśayan na pratikriyām

sāntvayām āsa—慰めた; *munibhiḥ*—居合わせたムニたちとともに; *hata-bandhūn*—友人や親族を失った者たち; *śucārpitān*—ショックと悲しみに打ちひしがれた人々; *bhūteṣu*—その生命体たちに; *kālasya*—全能者の至高の法則の; *gatim*—反動; *darśayan*—示された; *na*—～はない; *pratikriyām*—治療の方法。

主シュリー・クリシュナとムニたちは、全能者の過酷な法則について、そして生命体に及ぼす力について説き聞かせ、心に痛手をうけて悲しんでいる人々をなだめはじめた。

要旨解説

至高人格主神の命令で動いているきびしい自然の法則は、どのような生命体でも変えることができません。生命体は永遠に全能の主に従う立場にあります。主がすべての法則や秩序を作り、それらは一般的にダルマ (dharma) ・宗教として知られています。だれも宗教原則を作ることはできません。真実の宗教とは、主の命令に従うことを指します。主の命令は『バガヴァッド・ギーター』で言明されています。主だけに、あるいは主の命令に従えば、だれでも物質的・精神的に幸せになれます。物質界にいるかぎり主の命令に従う義務があり、主の恵みをうけて物質界の束縛から自由になれば、その解放の境地で主に神聖な愛情奉仕をすることができます。物質に縛られている私たちは、精神的な目をそなえていないために、自分自身はおろか、主を見ることもできません。しかし、物質的な病から解き放され、本来の精神的姿を取りもどしたとき、自分を見つけ、主にめぐりあうことができます。ムクティ (Mukti) とは、物質的な生活観念を捨てさったあとに自分本来の精神的境地にもどるということです。ですから人間生活は、この精神的解放が得られるよう自分を高めるためにあります。不運なことに、幻想の物質エネルギーに惑わされた私たちは、マーヤー (幻想) に作りだされた偽の現われでしかないこのうたかたの生活を、あたかもいつまでもつづくものと思ひこみ、国、家庭、土地、子ども、妻、地域社会、富などに惑わされています。そしてマーヤーに命じられるまま、まぼろしにすぎない所有物を守ろうとして他人と争うのです。しかし精神的知識を高めれば、このような物質的な自分にまつわる品々と自分はじつはなんの関係もないことを悟ることができ、そのときはじめて、物質的執着から解放されます。物質存在にある不安をこのように払拭することは、幻惑された心の奥深くに超越的な音をそそぐことのできる主の献愛者との交流で可能になります。そのとき、私たちはすべての嘆きや幻想からほんとうに解放されます。これが、物質界では決して解決できない誕生・死・老年・病気という厳格な物質自然界の法則の反動に苦しむ人々を救う方法です。戦争の犠牲者たち、すなわちクル家の親族たちは、死という問題に苦しめられ、主はそのようなかれらを知識を授けながら慰めるのでした。

第5節

साधयित्वाजातशत्रोः स्वं राज्यं कितवैर्हतम् ।
घातयित्वासतो राज्ञः कचस्पर्शक्षतायुषः ॥ ५ ॥

サーダハイトウヴァージャータ・シャトウローホ
sādhayitvājāta-śatroḥ

スヴァンム ラージャンム キタヴァイル フリタンム
svaṁ rājyaṁ kitavair hṛtam

ガハータイトウヴァーサトー ラーギヤハ
ghātayitvāsato rājñah

カチャ・スパルシャ・クシャターユシャハ
kaca-sparśa-kṣatāyusaḥ

sādhayitvā—実行されて; *ajāta-śatroḥ*—敵を持たない者の; *svam rājyam*—自分の王国; *kitavaiḥ*—ずるがしこい者 (ドゥリヨーダナとその一味); *hṛtam*—強奪した; *ghātayitvā*—殺されて; *asataḥ*—無節操な者たち; *rājñāḥ*—女王の; *kaca*—髪の毛; *sparśa*—手荒く扱った; *kṣata*—短縮されて; *āyusaḥ*—寿命を。

悪賢いドゥリヨーダナとその一味は奸策をめぐらし、敵を作らないユディシュティラ王の国を強奪した。やがてその王国も主のはからいで王の手に返され、ドゥリヨーダナに荷担した不徳の王らは主によって殺された。他の兵士たちも戦士したが、それは、ドゥラウパディー女王の髪を乱暴に扱ったために寿命が減少したことによるものである。

要旨解説

栄光に輝いた時代、すなわちカリ時代が到来するまえ、ブラフマー、牛、女性、子ども、老人は正しく守られていました。

1. ブラフマーを保護することで、ヴァルナ (*varṇa*) とアーシュラマ (*āśrama*) 制度という精神生活達成のための科学的な文化が維持されます。
2. 牛を守ることで、もっとも奇跡的な食糧である牛乳が確保されます。牛乳は、人生の高尚な目標を理解するための繊細な脳組織を維持することができます。
3. 女性を守ることで、社会の貞節が維持されます。その結果、平和で落ち着いた優秀な世代と生活の発展が得られます。
4. 子どもを守ることで、社会は、物質的束縛からの解放を目指す最大のチャンスを得ることができます。子どもの保護は、ガルバーダーナ・サムスカーラ (*garbhādhāna-saṃskāra*) という純粋な生命体を得る浄化方法をとおして、子どもを授かる時点から始まります。
5. 老人を守ることで、死後に優れた生活を手に入れる機会が得られます。

この完璧な綱領は、「洗練された犬や猫の文化」に陥ることのない優れた人間性へ導く展望が基本になっています。この項目で挙げられている純真な生物を殺したり、ただかれらに無礼をはたらくだけで寿命を短くしたりする危険があるため、完全に禁止されています。カリ時代では、この生物たちはただしく守られてはおらず、そのため、現代人の寿命はひじょうに短命になっています。『バガヴァッド・ギーター』は、女性がただしく守られていなければ、不必要な子どもたち・ヴァルナ・サンカラ (*varṇa-saṅkara*) が生まれてくる、と説いています。貞節な女性を侮辱する人は、自分の生涯に大災難を招きいれている、ということです。ドゥリヨーダナの弟だったドゥフシャーサナは、理想的な淑女であ

るドウラウパディーを冒瀆したため最低の人間になりさがり、若くして命を落としました。前述した主の厳格な法則は、このようにして現実化するのです。

第6節

याजयित्वाश्वमेधैस्तं त्रिभिरुत्तमकल्पकैः ।
तद्यशः पावनं दिक्षु शतमन्योरिवातनोत् ॥ ६ ॥

ヤージヤイトウヴァーシュヴァメーダハイス タンム
yājayitvāśvamedhais tam

トゥリビヒル ウッタマ・カルパカイヒ
tribhir uttama-kalpakaiḥ

タドウ・ヤシャハ パーヴァナンム ディクシュ
tad-yaśaḥ pāvanam dikṣu

シャタ・マニョール イヴァータノートウ
śata-manyor ivātanot

yājayitvā—執行することで; *śvamedhaiḥ*—馬をいけにえにするヤギヤ; *tam*—かれに(ユディシュティラ王); *tribhiḥ*—3; *uttama*—最善の; *kalpakaiḥ*—適切な材料が提供され、有能な僧侶によって執行された; *tad*—その; *yaśaḥ*—名声; *pāvanam*—高潔な; *dikṣu*—あらゆる方向; *śata-manyor*—そのような儀式を100回おこなったインドラ; *iva*—~のような; *atanot*—広めた。

主シュリー・クリシュナは、アシュヴァメーダ・ヤギヤ (*Aśvamedha-yajña*) 「馬のいけにえ儀式」をするようマハーラージャ・ユディシュティラ王にうながし、王は3回見事に執行した。主は、そのことで同じ儀式を100回執行したインドラのように、王の徳の高き栄光があらゆる場所で讃えられるきっかけをつくった。

要旨解説

これは、マハーラージャ・ユディシュティラがおこなったアシュヴァメーダ・ヤギヤのきっかけといえます。マハーラージャ・ユディシュティラと天上のインドラ王と比較することには重要な意味がふくまれています。天上の王はマハーラージャ・ユディシュティラよりはるかに膨大な富を持っていますが、マハーラージャ・ユディシュティラの名声はその富に劣りません。天上の王はヤギヤを何百回も執行していますが、主の純粋な献愛者であるユディシュティラ王が同じヤギヤを3回しか執行していないにもかかわらず、ただ主の恩寵によってユディシュティラ王は天上の王に匹敵する境地に高められたからなのです。

それが献愛者の特権です。主はだれにも平等ですが、献愛者はだれよりも讃えられます。あらゆる面で偉大な人物といつも結ばれているからです。太陽の光は分けへだてなくすべてを照らしていますが、それでもいつも暗い場所があるものです。その暗さは太陽のせいではなく、照らされる側の問題です。おなじように、完全に主に仕える人物は、どこにでも平等に分けあたえられている主の慈悲をあますところなく授かることができます。

第7節

आमन्त्र्य पाण्डुपुत्रांश्च शैनेयोद्धवसंयुतः ।
द्वैपायनादिभिर्विप्रैः पूजितैः प्रतिपूजितः ॥ ७ ॥

アーマントウリヤ パーンドウ・プトウラーンムシュ チャ
āmantrya pāṇḍu-putrāṁś ca

シャイネーヨーツダハヴァ・サンムユタハ
śaineyoddhava-samyutaḥ

ドウヴァイパーヤナーディビヒル ヴィプライヒ
dvaipāyanaādibhir vipraiḥ

プージタイヒ プラティプージタハ
pūjitaiḥ pratipūjitaḥ

āmantrya—招いている; *pāṇḍu-putrān*—パーンドウのすべての子息; *ca*—もまた; *śaineya*—サーチャキ; *uddhava*—ウツダヴァ; *samyutaḥ*—を伴って; *dvaipāyana-ādibhiḥ*—ヴェーダヴァーサのようなりシたちによって; *vipraiḥ*—ブラーフマナたちによって; *pūjitaiḥ*—崇拜されて; *pratipūjitaḥ*—主も等しく対応した。

そして主シュリー・クリシュナは出立の準備をはじめた。主はシュリーラ・ヴァーサデーヴァをはじめとするブラーフマナたちの崇拜を受けたあと、パーンドウの子たちを招いた。そしてかれらの表敬に感謝の気持ちを表わした。

要旨解説

主シュリー・クリシュナはクシャトリヤで、ブラーフマナの崇敬を受ける立場にはいませんでした。しかし、シュリーラ・ヴァーサデーヴァをはじめとするブラーフマナたちは主が人格主神であることを承知していたため、主を崇拜したのです。主がかれらの敬意に応えたのは、クシャトリヤがブラーフマナに従う階級規範を讃えるためです。主シュリー・クリシュナは、あらゆる階級の有力者から至高主にふさわしい敬意をいつも受けていますが、4つの社会階級の慣習を無視することはありません。主は、社会の規範に従った自分の行為に、将来の人々も倣ってくれることを意図してふるまっていたのです。

第8節

गन्तुं कृतमतिर्ब्रह्मन् द्वारकां रथमास्थितः ।
उपलेभेऽभिधावन्तीमुत्तरां भयविह्वलाम् ॥ ८ ॥

ガントウナム クリタマティル ブラフマン
gantum̐ kṛtamatiḥ brahman

ドウヴァーラカーナム ラタハンム アースティタハ
dvārakām̐ ratham̐ āsthitaḥ

ウパレーベヘー ビヒダハーヴァンティーンナム
upalebhe 'bhidhāvantiṁ

ウッターラナム バハヤ・ヴィフヴァラナム
uttarām̐ bhaya-vihvalām̐

gantum—発とうとしたそのとき; *kṛtamatiḥ*—決心して; *brahman*—おお、ブラーフマナ; *dvārakām*—ドウヴァーラカーに向けて; *ratham*—馬車に乗って; *āsthitaḥ*—座って; *upalebhe*—見た; *abhidhāvantiṁ*—走ってきた; *uttarām*—ウッターラ; *bhaya -vihvalām*—恐れて。

主がドウヴァーラカーに向けて発とうとして馬車に座ったそのとき、恐怖にかられたウッターラが血相を変えて走ってくるのを見た。

要旨解説

パандаヴァ家の人々はすべてを主にゆだねており、ゆえに主も、どのような状況にあってもかれらを守ってきました。主はだれでも守りますが、自分にすべてをまかせている人をとりわけ大切にします。父親は、自分に頼りきっている幼い我が子に注意をはらうものです。

第9節

उत्तरोवाच

पाहि पाहि महायोगिन्देवदेव जगत्पते ।
नान्यं त्वदभयं पश्ये यत्र मृत्युः परस्परम् ॥ ९ ॥

ウッターローヴァーチャ
uttarovāca

パーヒ パーヒ マハー・ヨーギン
pāhi pāhi mahā-yogin

デーヴァ・デーヴァ ジャガトウ・パテー
deva-deva jagat-pate

ナーニヤム トウヴァドゥ アバハヤム パッシェー
nānyam tvad abhayam paśye

ヤトウラ ムリテュフ パラスパラム
yatra mṛtyuḥ parasparam

uttarā uvāca—ウッターラが言った; *pāhi pāhi*—お守りください、どうかお守りください; *mahā-yogin*—もっとも偉大な神秘家; *deva-deva*—崇拜される方のなかで崇拜に値する方; *jagat-pate*—おお、宇宙の主よ; *na*—ではない; *anyam*—ほかのだれも; *tvat*—あなた以外に; *abhayam*—恐れのない心境; *paśye*—私は見る; *yatra*—どこにある; *mṛtyuḥ*—死; *parasparam*—二元性の世界のなかで。

ウッターラが言う。「おお、神々の主よ、宇宙の主よ！ あなたはもっとも偉大な神秘家です。どうか私をお守りください。この二元性の世界では、あなた以外に私を死の手から救ってくださる方はいないからです。

要旨解説

物質界は二元性の世界であり、絶対的世界にある一体性と対比されます。二元性の世界は物質と精神で組みあわされていますが、絶対的世界は物質にまったくかわりのない完璧な精神的要素で作られています。二元性の世界では、だれもが主人になろうとまちがった考え方をしていますが、絶対的世界では主が絶対的な主人であり、その他すべての魂は主の絶対的な召使いです。二元性の世界では、だれもが他の人すべてに「嫉妬」しており、物質と精神という二元性のなかで生きているために、死ぬことはまぬがれません。主は、身をゆだねた魂にとって唯一の恐れのない保護者です。物質界では、主の蓮華の御足にすべてをゆだねないかぎり、だれも残酷な死から自分を救うことはできません。

第10節

अभिद्रवति मामीश शरस्तसायसो विभो ।
कामं दहतु मां नाथ मा मे गर्भो निपात्यताम् ॥ १० ॥

アビドウラヴァティ マーンム イーシャ
abhidravati mām īśa

シャラス タプターヤソー ヴィボハー
śaras taptāyaso vibho

カーマンム ダハトゥ マーンム ナータハ
kāmam dahatu mām nātha

マー メー ガルボホー ニパーチャターナム
mā me garbho nipātyatām

abhidravati—近づいてくる; mām—私を; īśa—おお、主よ; śaraḥ—矢; tapta—炎のような; ayasaḥ—鉄; vibho—おお、偉大なる方; kāmam—望む; dahatu—燃やしてください; mām—私を; nātha—守ってくださる方よ; mā—ではない; me—私の; garbhaḥ—胎児; nipātyatām—流産させる。

主よ、あなたは万能の力をお持ちです。いま、真っ赤に燃える矢がすさまじい速さで私に迫っています。主よ、あなたがお望みなら私が燃えつきてもかまいません。でも、どうかおなかの子が焼かれず、流産しないようお守りください。主よ、どうかこの願いをお聞きいれください。

要旨解説

この出来事は、ウッターラーの夫であるアビマニュが戦死したあとに起こりました。未亡人となったウッターラーは夫のあとを追うべき立場にあったのですが、子を宿していたために、しかもその子が偉大な献愛者であるマハーラージャ・パリークシットであったため、その子を守る責任がありました。母親はなにがあってもその子を守る責任があったため、ウッターラーは恥も外聞もかなぐり捨てて主クリシュナに救いを求めたのです。ウッターラーは偉大な王の娘であり、偉大な英雄の妻であり、そして偉大な献愛者の生徒であり、やがてのちには、偉大な王の母親にもなる女性でした。あらゆる面で幸運な女性だったのです。

第 1 1 節

सूत उवाच

उपधार्य वचस्तस्या भगवान् भक्तवत्सलः ।

अपाण्डवमिदं कर्तुं द्रौणेरस्रमबुध्यत ॥ ११ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

ウパダハーリヤ ヴァアチャス タツシャー
upadhārya vacas tasyā

バハガヴァーン バハクタ・ヴァトウサラハ
bhagavān bhakta-vatsalaḥ

アパーンダヴァンム イダンム カルトウンム
apāṇḍavam idam kartum

ドゥラウネール アストウラム アブデヤタ
drauṇer astram abudhyata

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *upadhārya*—ウッタラーの言葉をよく聞き; *vacāḥ*—言葉; *tasyāḥ*—彼女の; *bhagavān*—人格主神; *bhakta-vatsalaḥ*—自分の献愛者には情け深い主; *apāṇḍavam*—パーンダヴァたちの末裔がいないため; *idam*—これ; *kartum*—それをするため; *drauṇeḥ*—ドゥローナーチャーリヤの子の; *astram*—武器; *abudhyata*—理解した。

スータ・ゴースヴァーミーが言う。「ウッタラーの言葉を最後まで聞いた主シュリー・クリシュナは、献愛者にはいつでも情け深いその思いから、ウッタラーの窮地をすぐに理解した。それは、ドゥローナーチャーリヤの子であるアシュヴァッターマーが、パーンダヴァ家の最後の命を奪うために投げたブラフマーストラだったのである」

要旨解説

主はどんなときでも公平にふるまう方ですが、献愛者をとくに大事にします。それがすべての人の幸福に必要なことだからです。パーンダヴァ家は主の従者の家系であり、主はこの一族に世界を治めてほしいと思っていました。ドゥリヨーダナー族の統治を終わらせ、マハーラージャ・ユディシュティラの統治を築いた主の思惑でもありました。ですから主は、まだ体のなかにいたマハーラージャ・パリークシットをも守るつもりでした。理想的な献愛者の家系であるパーンダヴァ家のいない世界を望んでいなかったのです。

第 1 2 節

तर्ह्येवाथ मुनिश्रेष्ठ पाण्डवाः पञ्च सायकान् ।
आत्मनोऽभिमुखान्दीप्तानालक्ष्यास्त्राप्युपाददुः ॥ १२ ॥

タルヒ エーヴァータハ ムニ・シュレーシュタハ
tarhy evātha muni-śreṣṭha

パーンダヴァーハ パンチャ サーヤカーン
pāṇḍavāḥ pañca sāyakān

アートウマノー ビヒムカハーン ディープターン
ātmano 'bhimukhān dīptān

アーククシャーストウラーニ ウパーダドゥフ
ālakṣyāstrāṇy upādaduḥ

tarhi—そのとき; *eva*—もまた; *atha*—ゆえに; *muni-śreṣṭha*—ムニの筆頭者よ;

pāṇḍavāḥ—パンドウ王の子全員が; *pañca*—5; *sāyakān*—武器; *ātmanaḥ*—自分自身; *abhimukhān*—～に向かって; *diptān*—まばゆい; *ālakṣya*—それを見ている; *astrāṇi*—武器; *upādaduḥ*—構えた。

偉大な思索家（ムニ）のなかの筆頭者シャウナカよ。まばゆい光を放ちながら迫ってくるブラフマーストラを見たパンドヴァ兄弟は、それぞれの武器を手に、迎え撃つ体勢をとった。

要旨解説

ブラフマーストラは核兵器よりも緻密な武器です。アシュヴァッターマーがブラフマーストラを放ったのは、マハーラージャ・ユディシュティラを筆頭とする5人のパンドヴァ兄弟、そしてウッターラーの胎内にいた孫だけを殺すためでした。ですから、原子爆弾よりも精密な力を発揮するブラフマーストラは、原子爆弾のような無軌道な武器ではありません。原子爆弾はいったん投下されると、標的やそれ以外の物体が識別できません。制御がまったく効かないため、かならず一般市民も犠牲になります。ブラフマーストラはそのような武器ではありません。狙った標的だけに迫り、無関係の人々を傷つけずに攻撃します。

第13節

व्यसनं वीक्ष्य तत्तेषामनन्यविषयात्मनाम् ।
सुदर्शनेन स्वास्त्रेण स्वानां रक्षां व्यधाद्विभुः ॥ १३ ॥

ヴァサナンム ヴィークツシャ タトウ テーシャンム
vyasanam vikṣya tat teṣām

アナニヤ・ヴィシャヤートウマナーンム
ananya-viṣayātmanām

スダルシャネーナ スヴァーストウレーナ
sudarśanena svāstreṇa

スヴァーナーンム ラクシャーンム ヴァダハードウ ヴィブフ
svānām rakṣām vyadhād vibhuḥ

vyasanam—大きな危険; *vikṣya*—を見て; *tat*—それ; *teṣām*—彼らの; *ananya*—それ以外; *viṣaya*—手段; *ātmanām*—このように心を傾け; *sudarśanena*—シュリー・クリシュナの輪によって; *sva-astreṇa*—その武器で; *svānām*—自分の献愛者の; *rakṣām*—保護; *vyadhāt*—それをした; *vibhuḥ*—全能者。

全能の人格主神シュリー・クリシュナは、服従しきった魂である純粋な献愛者が一刻を争う危機にさらされているのを見て、かれらを守るためにすぐさま自分の武器スダルシャナを取りだした。

要旨解説

アシュヴァッターマーから放たれた究極の武器ブラフマーストラは核兵器に似ていますが、より強い放射線と熱を持っています。この武器はヴェーダに記録されている緻密な音によって作りだされることから、より洗練された科学による産物です。この武器の優れたもうひとつの特徴は、標的だけを攻撃し、それ以外に害は加えないという点であり、核兵器のように見境なく破壊することはありません。アシュヴァッターマーはこの武器を、ただパーンドゥ家の男性すべてを殺害するために放ちました。ですからこの武器は、完璧に守られている場所においても100パーセント正確無比に命中させられることから、原子爆弾よりも危険だと言えます。主シュリー・クリシュナはこのことを承知していたため、クリシュナだけしか知らない献愛者を守るためにすぐに自分の武器を取りだしました。『バガヴァッド・ギーター』で主は、献愛者は決して滅びない、とはっきり約束しています。そして、献愛者がおこなう献愛奉仕の質や段階にあわせて対応します。この節にある *ananya-viśayātmanām* (アナニヤ・ヴィシャヤートウマナーンム) という言葉は重要です。パーンダヴァ兄弟は偉大な兵士ばかりでしたが、主だけに頼っていました。しかし主は最強の兵士でさえ軽視したり、また瞬時に倒したりします。パーンダヴァたちがこのブラフマーストラを撃破する一刻の猶予もないことを見てとったとき、主は誓いを破る危険をおかしてでも自分の武器を取りだしました。クルクシェートラの戦いはほぼ終結していましたが、主は誓いを守って自分の武器は使うべきではありませんでした。しかし、誓いを守るよりも緊急事態を脱出するのが先決です。主は、バクタ・ヴァトウサラ (*bhakta-vatsala*) ・「献愛者をこよなく愛する人」と知られています。ですから、立てた誓いは破らない、と言う世間一般の道德家よりも、バクタ・ヴァトウサラでありつづけることを選んだのです。

第14節

अन्तःस्थः सर्वभूतानामात्मा योगेश्वरो हरिः ।
स्वमाययावृणोद्गर्भं वैराट्याः कुरुतन्तवे ॥ १४ ॥

アンタフスタハハ サルヴァ・ブフターナーンム
antaḥsthaḥ sarva-bhūtānām

アートウマー ヨーゲーシュヴァロー ハリヒ
ātmā yogeśvaro hariḥ

スヴァ・マーヤヤヴリノドゥ ガルバハンム

sva-māyayāvṛṇod garbham

ヴァイラーチャーハ クル・タンタヴェー
vairāṭyāḥ kuru-tantave

antaḥsthaḥ—内にいる； *sarva*—すべての； *bhūtānām*—生命体の； *ātmā*—魂；
yoga-iśvaraḥ—あらゆる神秘の主； *hariḥ*—至高主； *sva-māyayā*—自分の勢力を使って；
āvṛṇot—包んだ； *garbham*—胎児； *vairāṭyāḥ*—ウッタラーの； *kuru-tantave*—マハーラー
ジャ・クルの子孫のために。

至高の神秘家の主・シュリー・クリシュナは、パラマートマーとしてすべての心臓のなかに住んでいる。ゆえに、クル王家の子孫を守るためだけに、自分の力を駆使してウッタラーの胎児を包みこんだ。

要旨解説

至高の神秘主義の筆頭者である主は、完全分身の姿であるパラマートマーとして同時にすべての心のなかに、そして原子のなかにでさえいます。ですから、ウッタラーの体のなかに入って、マハーラージャ・パリークシットを救うためにその胎児を包みこみ、パードウ王の孫として生まれたマハーラージャ・クルの子孫を守りました。ドゥリタラーシュトウラの息子たち、そしてパードウ王の息子たち双方とも、マハーラージャ・クルの王家に属しています。ですから、両者とも一般的にクル家として知られています。しかし、2つの家系に不和が生じたとき、ドゥリタラーシュトウラの息子たちはクル家として、パードウ王の息子たちはパードヴァ家として知られるようになりました。ドゥリタラーシュトウラの息子や孫たちは全員クルクシェートラで戦死したため、この王家の最後の子息はクル家の子として呼ばれるようになります。

第15節

यद्यप्यस्त्रं ब्रह्मशिरस्त्वमोघं चाप्रतिक्रियम् ।
वैष्णवं तेज आसाद्य समशाम्यद् भृगूद्वह ॥ १५ ॥

ヤデャピ アストウランム ブラフマ・シラス
yadyapy astram brahma-śiras

トウヴ アモーガハンム チャープラティクリヤンム
tv amogham cāpratikriyam

ヴァイシュナヴァンム テージャ アーサーデャ
vaiṣṇavam teja āsādyā

サマシャーミャドゥ ブフリグードウヴァハ

samaśāmyad bhṛgūdvaha

yadyapi—ではあるが; agram—武器; brahma-sīrah—最高の; tu—しかし; amogham—阻止されることのない; ca—そして; apratikriyam—反撃されることのない; vaiṣṇavam—ヴィシュヌとの関係において; tejaḥ—力; āsādyā—～で支配されて; samaśāmyat—力が消滅された; bhṛgu-udvaha—ブリグ家の誉れよ。

おお、シャウナカ。アシュヴァッターマーが放った究極の武器ブラフマーストラは人間には止めることも反撃することもできないが、ヴィシュヌ（主クリシュナ）の力のまえでその力は消滅し、不発に終わった。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』では、まばゆく光る神々しい光ブラフマジョーティは主シュリー・クリシュナに支えられていると言われています。言葉を変えると、ブラフマ・テージヤス (brahma-tejas) として知られるまばゆい光は、太陽から放たれている太陽光線のように、主から発出されている光そのものである、ということです。このように、このブラフマンの武器が物質的には対抗できない武器であっても、主の至高の力を凌ぐことはできなかった、ということです。アシュヴァッターマーが放ったブラフマーストラは主シュリー・クリシュナによってその力が消滅し、無力になりました。それは主自身の力によるものです。つまり、主は絶対者であるため別の力に救いを求める必要がなかった、ということです。

第16節

मा मंस्था ह्येतदाश्चर्यं सर्वाश्चर्यमयेऽच्युते ।
य इदं मायया देव्या सृजत्यवति हन्त्यजः ॥ १६ ॥

マ マンムスタハー ヒ エータドゥ アーシュチャリヤンム
mā maṁsthā hy etad āścaryam

サルヴァーシュチャリヤマイエー チュテー
sarvāścaryamaye 'cyute

ヤ イダンム マーヤヤー デーヴァー
ya idaṁ māyayā devyā

スリジャティ アヴァティ ハンティ アジャハ
sṛjaty avati hantya ajaḥ

mā—～してはいけない; maṁsthāḥ—考える; hi—確かに; etat—これらすべて;

āścaryam—素晴らしい; sarva—すべて; āścarya-maye—完全に神秘的な; acyute—完全無欠な者; yaḥ—である者; idam—これ（創造）; māyayā—主の勢力によって; devyā—超越的; sṛjati—創造する; avati—維持する; hanti—破壊する; ajaḥ—生まれることのない。

ブラーフマナたちよ。この出来事を、不可思議かつ完全無欠の人格主神がするなにか特に素晴らしいものと考えてはならない。主は誕生しない方であっても、自分の超越的な勢力を使って物質すべてを維持し、破壊する。

要旨解説

主のすることは、生命体の小さな頭脳には想像を絶するものばかりです。至高主に不可能なことはなにもありませんが、主の行動は私たちにとってすべて素晴らしく、そのようにして主はいつも私たちの想像の範囲を超えています。主はあらゆる力をそなえ、あらゆる面で完璧な人格主神です。主は100パーセント完璧ですが、その他の、たとえばナーラーヤナ、ブラフマー、シヴァ、半神、他のいっさいの生命体は、主の完璧な力を部分的にそなえています。だれも主に等しく、主を凌ぐ者はいない、ということです。主に競争相手はいないので。

第17節

ब्रह्मतेजोविनिर्मुक्तैरात्मजैः सह कृष्णया ।
प्रयाणाभिमुखं कृष्णमिदमाह पृथा सती ॥ १७ ॥

ブラフマ・テージュ・ヴィニルムクタイル
brahma-tejo-vinirmuktair

アートウマジャイヒ サハ クリシュナヤー
ātma-jaiḥ saha kṛṣṇayā

プラーヤーナービムカナム クリシュナンム
prayāṇābhimukhaṁ kṛṣṇam

イダンム アーハ プリタハー サティー
idam āha pṛthā satī

brahma-tejaḥ—ブラフマーストラの放射線; vinirmuktaiḥ—～から救われて; ātma-jaiḥ—子どもたちと; saha—～とともに; kṛṣṇayā—ドウラウパディー; prayāṇa—出発する; abhimukham—～に向かって; kṛṣṇam—主クリシュナに; idam—この; āha—言った; pṛthā—クンティー; satī—忠実で、主に身をゆだねている。

主に忠実なクンティーはこうしてブラフマーストラの放射線から救われ、5人の息子た

ちとドウラウパディーは、自国にもどろうとする主に向かって話しかけた。

要旨解説

クンティーはこの節でサティー (sati) という言葉で表現されています。これは忠実であることを指す言葉で、主シュリー・クリシュナに対するその純粋な愛情ゆえに使われています。クンティーの思いは、主クリシュナに向けられた祈りのなかに表現されています。主の忠実な献愛者は、危機に瀕してもほかの生命や半神などに救いを求めることはありません。それが、パーンダヴァ家に受けつがれてきた特質です。パーンダヴァたちの心にはクリシュナしかいなかったため、主も、どんなときでもかれらを助けることを考えていました。それが主の崇高な気質です。ですから、不完全な生命体や半神に救いを求めることはせず、献愛者を救うことのできる主クリシュナに助けを求めなくてはなりません。そのような忠実な献愛者は主の助けを求めることはしないのですが、主のほうに助けたいといつも考えています。

第18節

कुन्त्युवाच

नमस्ये पुरुषं त्वाद्यमीश्वरं प्रकृतेः परम् ।
अरुक्ष्यं सर्वभूतानामन्तर्बहिरवस्थितम् ॥ १८ ॥

クンティ ウヴァーチャ
kuntī uvāca

ナマッシエー プルシャナム トウヴァーデヤナム
namasye puruṣam tvādyam

イーシュヴァランム プラクリテーヘ パランム
īśvaram prakṛteḥ param

アラクッシャナム サルヴァ・ブフターナーナム
alakṣyam sarva-bhūtānām

アントル バヒル アヴァスティタンム
antar bahir avasthitam

kuntī uvāca—シュリーマティー・クンティーが言った; namasye—敬意を表します; puruṣam—至高の人物; tvā—あなた; ādyam—根源の人物; īśvaram—支配者; prakṛteḥ—物質宇宙; param—～を超えた; alakṣyam—目に見えない方; sarva—すべて; bhūtānām—生命体たちの; antaḥ—～の内に; bahiḥ—～の外に; avasthitam—存在している。

シュリーマティー・クンティーが言った。「私はあなたに敬意を表します。根源の人物であり、物質界の質に乱されない人物だからです。そしてあなたは、万物の内にも外にも存在し、それでいてだれも見ることのできない方でもあります」

要旨解説

シュリーマティー・クンティーデーヴィーは、クリシュナが自分の甥としてふるまっても、根源の人格主神であることをよく知っていました。そのように達観した女性は、甥に敬意をあらわしても、まちがったことをしているわけではありません。ですから、クンティーデーヴィーはクリシュナに「物質宇宙を超えた根源のプルシャ」と呼びかけます。どの生命体も物質界を超越していますが、根源でも完全無欠でもありません。生命体は物質自然にあやつられているため墮落しがちなのですが、主にそのような傾向はありません。ゆえにヴェーダ（『カタ・ウパニシャッド』第2編・第2章・第13節）では、*nityo nityānām cetanaś cetanānām*（ニテヨー ニチャーナーナム チェータナシュ チェータナーナム）「主はすべての生命体の筆頭者である」と言われています。また、主はイーシュヴァラ（*iśvara*）「支配者」とも呼びかけられています。生命体あるいはチャンドラやスーリヤのような半神もある程度の力を持ったイーシュヴァラと呼べますが、至高のイーシュヴァラ、すなわち究極の支配者とは呼べません。主こそがパラメーシュヴァラ（*parameśvara*）、超靈魂です。主は内にも外にもいます。シュリーマティー・クンティーの甥として目のまえにいても、同時に、クンティーの内にも、別の場所にも存在しています。『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第15節）で、「わたしはすべての魂の心のうちにあり、わたしゆえに記憶や忘却や認識力などが生じる。わたしはヴェーダの編纂者であるから、ヴェーダをとおしてわたしは理解される」と言っています。クンティー女王は、「主は全生命体の内にも外にもいるが、目には見えない方」と断言しています。主は、一般人には不可思議な存在なのです。クンティー女王は、主が自分の目のまえにいながら、ウッターの胎内に入り、胎児をブラフマーストラの攻撃から守ったことを知りました。女王本人が、シュリー・クリシュナが遍在しているのか1カ所にいるのか混乱したのです。じつはどちらの存在でもあるのですが、身をゆだねていない魂には正体を見せない、という主の権利があります。この遮断するカーテンが至高主のマーヤーの力であり、その力が、主に反抗する魂の狭い視野を操っているのです。そのことが次の節で説明されています。

第19節

मायाजवनिकाच्छन्नमज्ञाधोक्षजमव्ययम् ।
न लक्ष्यसे मूढदुशा नटो नाट्यधरो यथा ॥ १९ ॥

マーヤー・ジャヴァニカーツチャンナム
māyā-javanikācchannam

アギヤードホークシャジャンム アヴァヤナム
ajñādhokṣajam avyayam

ナ ラクツシャセー ムーダハ・ドウリシャー
na lakṣyase mūḍha-dṛśā

ナトー ナーテヤダハロー ヤタハー
naṭo nāṭyadhāro yathā

māyā—惑わしている; *javanikā*—幕; *ācchannam*—〜に覆われている; *ajñā*—無知な; *adhokṣajam*—物質的知覚の範囲を(超越的に)超えている; *avyayam*—非難の余地のない; *na*—ではない; *lakṣyase*—見られている; *mūḍha-dṛśā*—愚かな観察者; *naṭaḥ*—芸術家; *nāṭya-dharaḥ*—役者のように衣服をまとっている; *yathā*—〜として。

あなたは、私たちの限界ある感覚の知覚範囲を超えておられるため、眩惑の力という幕に覆われた永遠かつ完璧なお方です。愚か者にはあなたが見えません。あたかも、衣装をまとった役者と本人の見分けがつかないように。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で主シュリー・クリシュナは、知性に欠ける人は主を自分と同じふつうの人間と見るため、主をあざ笑う、と述べています。同じことが、この節でクンティ女王によって確認されています。知性に欠ける人々とは、主の権威に対抗する人たちを指し、アスラ (*asura*) という名前で知られています。アスラは主の権威を認めようとしません。主は私たち人間社会に、ラーマ、ヌリシンハ、ヴァラーハなどとして、あるいは本来の姿であるクリシュナとして現われ、人間にはどうていできないすばらしいことをします。この偉大な書物の第10編にあるように、主シュリー・クリシュナは、母親の膝のうえにいるときから、人間には不可能なことを見せました。魔女プータナーは乳房に毒を塗って主を殺そうとしたのですが、逆に主に殺されました。ふつうの幼児のようにプータナーの乳房を吸い、そして命まで吸い取ったのです。同じように、主は子どもがキノコをつまみあげるかのように、ゴーヴァルダンの丘を持ちあげ、ヴリンダーヴァンの住民たちを守るために数日間そのまま立ちつづけました。これらが、プラーナ、イティハーサ(史書)、ウパニシャッドなど権威あるヴェーダ經典に描写されている主の超人的活動です。また『バガヴァッド・ギーター』という形ですばらしい教えも残しました。英雄として、世帯者として、教師として、また放棄者としてすばらしい能力も見せています。主は、ヴァーサ、デーヴァラ、アシタ、ナーラダ、マドゥヴァ、シャンカラ、ラーマヌジャ、シュリー・チャイタンニャ・マハープラブ、ジューヴァ・ゴースヴァーミー、ヴィシュヴァ

ナータ・チャクラヴァルティー、バクティシッダーンタ・サラスヴァティー、他の師弟継承上の権威者によって、至高人格主神として受けいられています。またみずから、由緒ある文献の数多くの箇所でおなじことを宣言しています。しかしそれでも、主を至高の絶対真理者として受けいれようとしなない邪悪な心を持つ人々たちがいます。それは、そのような人たちの貧弱な知識や凝りかたまつた頑迷な気質が一原因であり、元はと言えば、過去と現在のさまざまな罪なおこないです。そのような人たちは、主が目まへのいたときでさえ、主シュリー・クリシュナが認識できませんでした。もうひとつの問題点は、不完全な感覚にたよっている人々は主を至高主として認識できない、ということです。現代の科学者がその典型です。科学者は、経験で得た知識ですべてを知ろうとしています。しかし、至高者を不完全な経験知識で知ることはできません。主はこの節でアドークシャジャ (*adhokṣaja*) 「経験的知識の範囲を超えた方」という言葉で表現されています。私たちの感覚はどれも不完全です。なんでも見てみせる、と豪語する人がいますが、目は物理的条件下でしか物を見ることが見えませんし、しかもその条件さえ私たちの思いどおりになりません。主は感覚で捉えられる範囲を超えている方なのです。クンティー女王は、条件づけられた魂の、特に知性が劣るとされる女性のこの欠陥をみずから認めました。知性の劣る人々には、寺院、モスク、教会のような施設が必要であり、そのような便宜をとおして主の権威が認識できるようになり、さらにそのような神聖な場所で正しい権威者から主について話が聞くことができます。そのような人々にはこの精神生活の始まりは欠かせないものですが、愚かな人々だけが、一般大衆が精神的特質を高めるに必要な崇拜の場所を非難します。知性に欠ける人々が寺院やモスクや教会でおこなわれている主という権威者にひれ伏すことは、高尚な献愛者が積極的な奉仕をとおして主を瞑想しているように、ひじょうに恩恵があることです。

第20節

तथा परमहंसानां मुनीनाममलात्मनाम् ।
भक्तियोगविधानार्थं कथं पश्येम हि स्त्रियः ॥ २० ॥

タタハー パラマハンムサーナーナム
tathā paramahaṁsānām

ムニーナーナム アマラートウマナーナム
munīnām amalātmanām

バクティ・ヨーガ・ヴィダハーナルタハンム
bhakti-yoga-vidhānārtham

カタハンム パッシェーマ ヒ ストゥリヤハ
katham paśyema hi striyaḥ

tathā—そのほかにも; paramaharṣanām—精神的に発達した超越主義者たちの;
muninām—偉大な哲学者あるいは思索家の; amala-ātmanām—精神と物質を識別できる
人々の; bhakti-yoga—献愛奉仕の科学; vidhāna-artham—実行するために; katham—ど
のように; paśyema—見ることができる; hi—確かに; striyaḥ—女性。

あなたは、献愛奉仕という超越的科学を、物質と精神の違いを知って清められた高尚な
超越主義者や思索家の心に授けるために降誕されました。では、私たちのような女性ほど
うやあってあなたを完璧に知ることができるのでしょうか。

要旨解説

もっとも優れた哲学者でさえ、推論しているだけで主の国に近づくことはできません。
ウパニシャッドでは、至高の真理者、絶対人格主神は、偉大な哲学者の思考力の範囲を超
えている、と言われていています。どれほど高い学識や優れた頭脳で推測しても、主を知るこ
とはできません。主の慈悲を授かった人だけが知ることができます。それ以外の人々は、
主について何年間考えつづけてもわかりません。この動かしがたい事実が、純朴な女性と
してふるまっているクンティー女王によって確認されています。ふつうの女性は哲学者の
ような思索はできませんが、主の祝福を授かっています。それは、主の卓越性や全能性を
すぐに信じることができるため、ためらうことなく主にお辞儀をすることができるからで
す。主は優しい方ですから、偉大な哲学者だけを特別扱いすることはありません。主は、
人がどれほど真剣に自分を求めているかよくわかっています。女性はこのような理由だけ
で、さまざまな宗教に大勢参加するものです。どの国のどの宗教でも、ほとんどの場合女
性信者の数がまさっています。主の権威を受け入れるこの純朴さは、人目を引いても中味
は偽善の宗教熱よりも主の恩寵が得られるのです。

第21節

कृष्णाय वासुदेवाय देवकीनन्दनाय च ।
नन्दगोपकुमाराय गोविन्दाय नमो नमः ॥ २१ ॥

クリシュナーヤ ヴァースデーヴァーヤ
kṛṣṇāya vāsudevāya

デーヴァキー・ナンダナーヤ チャ
devakī-nandanāya ca

ナンダ・ゴーパ・クマラーヤ
nanda-gopa-kumārāya

ゴーヴィンダーヤ ナモー ナマハ
govindāya namo namaḥ

kṛṣṇāya—至高主; *vāsudevāya*—ヴァスデーヴァの子息に; *devakī-nandanāya*—デーヴァキーの子息に; *ca*—そして; *nanda-gopa*—ナンダと牛飼いの男性たち; *kumārāya*—かれらの子息に; *govindāya*—牛と感覚に活力を与える人格主神; *namaḥ*—敬意をこめたお辞儀; *namaḥ*—お辞儀。

ですから私は、ヴァスデーヴァの子息となった方、デーヴァキーの喜びの源、ナンダとヴリンダーヴァンの牛飼いたちの愛し子、そして牛と感覚に活力を与える主に心から敬意を表します。

要旨解説

主は、どれほど物質的な美質を持っている人物でも近づくことができないことから、つきることのない、そしていわれない慈悲の心から、本来の姿で地上に降誕しました。無垢な献愛者に特別の慈悲を授け、そして邪悪な人間たちの増大を抑えるためでもあります。クンティー女王は、さまざまな化身以上に、とりわけ主クリシュナの化身あるいは降誕を崇めています。主クリシュナという化身がその他の化身に比べて親しみを感じるからです。ラーマの化身では、幼いころから王の子息として育てられていましたが、クリシュナの化身は、王の子息でしたが降誕した直後に両親（ヴァスデーヴァ王とデーヴァキー女王）のもとをはなれ、ヤショーダーマーイーのもとに身を寄せ、神聖な地ヴラジャブーミ（*Vrajabhūmi*）でふつうの牧童として暮らしました。そしてその暮らしが、主の幼いころの娯楽であることから、ひじょうに神聖なものとされています。ですから、主クリシュナは主ラーマよりも慈悲深いと言えます。もちろん主は、クンティーの兄であるヴァスデーヴァとその家族にとっても優しいはずです。ヴァスデーヴァとデーヴァキーの子になっていなければ、クンティー女王は主クリシュナを甥として話しかけることはできなかったはずですから、両親としての愛情からクリシュナに呼びかけていました。しかし、ナンダとヤショーダーは、主の他の娯楽よりもっと魅力的な幼少期の娯楽を味わえたのですから、ヴァスデーヴァとデーヴァキーよりも幸運です。『ブラフマ・サムヒター』（第5章・第29節）で、根源の地クリシュナローカはチンターマニ・ダーマ（*cintāmaṇi-dhāma*）と描写されています。ヴラジャブーミで繰りひろげられた主の幼少期の娯楽は、クリシュナローカでの永遠の暮らしの原型であり、その娯楽に匹敵するものではありません。主シュリー・クリシュナはみずから同じ環境で、そして主の神々しい仲間とともにヴラジャブーミに現われました。ゆえにシュリー・チャイタンニャ・マハープラブが断言しているように、ヴラジャブーミの住人たち、とくに主の満足のためにすべてを捧げた牛飼いの少女たちほど幸運な人たちはいません。ナンダとヤショーダーとの娯楽、また牛飼いの男性たちとの娯楽、とくに牧童や牛たちとの娯楽にちなんで、主はゴーヴィンダという名前と呼ばれるよ

うになりました。ゴーヴィンダとしての主クリシュナは、ブラーフマナや牛たちに心が向けられています、それは人類の繁栄がこの2種類の生き物の保護しだいであることをしめしています。主クリシュナはブラーフマナや牛のいない場所では満足しません。

第22節

नमः पङ्कजनाभाय नमः पङ्कजमालिने ।

नमः पङ्कजनेत्राय नमस्ते पङ्कजाङ्घ्रये ॥ २२ ॥

ナマハ パンカジャ・ナーバハーヤ
namaḥ paṅkaja-nābhāya

ナマハ パンカジャ・マーリネー
namaḥ paṅkaja-māline

ナマハ パンカジャ・ネートウラーヤ
namaḥ paṅkaja-netrāya

ナマス テー パンカジャーングフライエー
namas te paṅkajāṅghraye

namaḥ—あらゆる敬意をこめたお辞儀; *paṅkaja-nābhāya*—腹部に蓮華の花に似た特別のくぼみを持つ主に; *namaḥ*—お辞儀; *paṅkaja-māline*—いつも蓮華の花輪で飾られた方; *namaḥ*—お辞儀; *paṅkaja-netrāya*—蓮華の花のようなさわやかなまなざしを持つ方; *namaḥ te*—あなたへの敬意を込めたお辞儀; *paṅkaja-aṅghraye*—足の裏に蓮華の花びらの模様が刻まれた方（ゆえに蓮華の御足を持つ方とされる方）に。

主よ、心からの敬意をあなたに捧げます。あなたは腹部に蓮華の花びらのようなくぼみを持ち、いつも蓮華の花輪で飾られ、蓮華の花を思わせる涼しげなまなざしを持ち、その御足には蓮華の花模様が刻まれています。

要旨解説

この節では、人格主神の精神的な体に見られる特別な印について述べられています。その印が主の体と他の体の違いを明確にしています。どれも主の体にしか見られない特別な様相です。主は人間のように思われることがありますが、その比類のない姿ゆえの決定的な違いがあります。シュリーマティー・クンティーは、自分が女性であることを理由に、主を見る資格がないと言っています。女性、シェードラ（労働者階級）、上流の3階級にふさわしくない子孫ドウヴィジャ・バンドウ (*dvija-bandhu*) は、至高の絶対真理者の精神的名前、名声、特質、姿などにまつわる超越的な主題を理解する知性に欠けているからです。そのため、主にまつわる精神的な話題に加わるにはふさわしくないかもしれませんが、主のアルチャー・ヴィグラハ (*arcā-vigraha*) の姿なら見るすることができます。主のその

姿は、女性、シュードラ、ドウヴィジャ・バンドウを含む墮落した魂に恩寵を授けるために物質界に降誕しました。墮落した魂たちは物質を超えたものはなにも見ることができないため、主はまず無数の宇宙の一つひとつのなかにガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌ（Garbhodakaśāyī Viṣṇu）として入ります。このヴィシュヌは、超越的な腹部の中央にあるくぼみから蓮華の莖を伸ばし、その頂点の花の上から宇宙最初の生物・ブラフマーが誕生します。ですから、主はパンカジャナービ（Pañkajanābhi）という名前でも知られています。パンカジャナービとしての主は、さまざまな要素、すなわち心の内の姿、木でできた姿、土でできた姿、金属でできた姿、宝石でできた姿、絵の具で描写された姿、砂の上に描かれた姿などのアルチャー・ヴィグラハ（主の超越的姿）を受けいれます。このような主の姿はどれも蓮華の花輪で飾られており、寺院での崇拜には、俗な論争ばかりをしている献愛者とは違う人々の熱い関心を惹きつける穏やかな雰囲気はただよっていません。瞑想者は心のなかの姿を崇拜するものです。ですから主は、女性、シュードラ、ドウヴィジャ・バンドウたちのためにある崇拜寺院を訪ねることにかれら自身が同意しさえすれば、慈悲を授けてくれます。そのような訪問者は、貧弱な知識の持ち主が言う「偶像を崇拜」をしているわけではありません。偉大なアーチャーリヤは、知性に欠ける人たちのために崇拜のための寺院をさまざまな場所に用意していますから、ほんとうはシュードラや女性やそれ以下の段階にいるのに、寺院での崇拜を超越しているふりをしてはなりません。主を見るときは、まず蓮華の御足から、そして腿、腰、胸、そして顔という順番に視線を移していきます。主の蓮華の御足を見る習慣ができていないのに、最初から主の顔を見るのは避けるべきです。シュリーマティー・クンティーは、主の叔母でしたから、主が恥ずかしがらないように、蓮華の御足から見ることはしませんでした。主の心を害しないように、蓮華の御足の上部から、つまり主の腰から見はじめ、徐々に顔まで見つめ、そして蓮華の足を見たのでした。なにごとにも順番がある、ということです。

第23節

यथा हृषीकेश खलेन देवकी
 कंसेन रुद्धातिचिरं शुचार्पिता ।
 विमोचिताहं च सहात्मजा विभो
 त्वयैव नाथेन मुहुर्विपद्गणात् ॥ २३ ॥

ヤタハー フリシーケーシャ カハレーナ デーヴァアキー
yathā hr̥ṣīkeśa khalena devakī

カンムセーナ ルツダハーティチランム シュチャールピター
kaṁsena ruddhāticiraṁ śucārpitā

ヴィモーチターハンム チャ サハートウマジャー ヴィボハー

vimocitāham ca sahātmajā vibho

トゥヴァヤイヴァ ナーテヘーナ ムフル ヴィパドゥ・ガナートゥ
tvayaiva nāthena muhur vipad-gaṇāt

yathā—いわば; *hṛṣīkeśa*—感覚の主; *khalena*—妬む者によって; *devakī*—デーヴァキー (シュリー・クリシュナの母親); *kāmsena*—カムサ王によって; *ruddhā*—投獄されて; *ati-ciram*—長い間; *śuca-arpitā*—苦しんで; *vimocitā*—解き放った; *aham ca*—私も; *saha-ātma-jā*—私の子どもたちと; *vibho*—おお偉大な方; *tvayā eva*—あなたによって; *nāthena*—保護者として; *muhur*—つねに; *vipat-gaṇāt*—危険の繰り返しから。

おお、感覚の主・フリシーケーシャ、神々の主よ。あなたは、嫉妬深いカムサ王によって長く投獄されて苦しんでいた母上のデーヴァキーを自由の身にさせ、また私や私の子どもたちを、繰り返えし襲いかかる危険から救ってくれました。

要旨解説

クリシュナの母、そしてカムサ王の妹であるデーヴァキーは、夫のヴァスデーヴァとともに投獄されていました。嫉妬深いカムサ王が、デーヴァキーの8番目の子（クリシュナ）に殺されることを恐れていたからです。王は、クリシュナよりも先に生まれたデーヴァキーの子どもたち全員を殺しましたが、クリシュナは、育ての父であるナンダ・マハーラージャのもとへ移されて難をのがれました。クンティーデーヴィーも、息子たちとともに、たびかさなる危険から救われています。しかしクンティーデーヴィーは、はるかに深い恩寵を授かっています。主クリシュナはデーヴァキーの子どもたちを救いませんでしたが、クンティーデーヴィーの子どもたちは救っているからです。またこれは、デーヴァキーの夫であるヴァスデーヴァが生きていたからであり、いっぽうクンティー女王は未亡人で、クリシュナ以外に女王を救う人はいなかったからです。結論として、クリシュナは、より危険な状態にいる献愛者に恩寵をしめず、と言えます。ときに主は純粋な献愛者を危険な状態におとしいれますが、それは献愛者が絶望の淵にいればそれまで以上に主に心を集中させるからです。主に執着するほどに、献愛者には成功が待っているのです。

第24節

विषान्महाग्नेः पुरुषाददर्शना-

दसत्सभाया वनवासकृच्छ्रतः ।

मृधे मृधेऽनेकमहारथास्रतो

द्रौण्यस्रतश्चास्म हरेऽभिरक्षिताः ॥ २४ ॥

ヴィシャーナ マハーグネーヘ プルシャーダ・ダルシャナードゥ

viṣān mahāgneḥ puruṣāda-darśanād

アサトウ・サバ、ハーヤー ヴァナ・ヴァーサ・クリッチラタハ
asat-sabhāyā vana-vāsa-kṛcchrataḥ

ムリデヘー ムリデヘー ネーカ・マハーラタハーストウラトー
mṛdhe mṛdhe 'neka-mahārathāstrato

ドウラウニ・アストウラタシュ チャースマ ハレー ビヒラクシターハ
drauṇy-astrataś cāsma hare 'bhirakṣitāḥ

viṣāt—毒から; *mahā-agneḥ*—猛火から; *puruṣa-ada*—人喰族; *darśanāt*—戦って;
asat—邪悪な; *sabhāyāḥ*—集まり; *vana-vāsa*—森へ追放された; *kṛcchrataḥ*—苦しみ;
mṛdhe mṛdhe—戦いの繰り返し; *aneka*—多くの; *mahā-ratha*—偉大な將軍たち;
astrataḥ—武器; *drauṇi*—ドゥローナーチャーリヤの子息; *astrataḥ*—～の武器から;
ca—そして; *āsma*—過去を示す; *hare*—おお主よ; *abhirakṣitāḥ*—完全に守られた。

私の主クリシュナよ。あなたは私たちを、毒入りの菓子、猛火、人喰族、邪悪な一味、森への追放という苦しみ、大將軍たちが加わった戦争から救ってくれました。そしていま、アシュヴァッターマーの武器から、私たちを救ったのです。

要旨解説

クンティー女王たちがどれほどの危険に遭遇したかが述べられています。デーヴァキーは嫉妬深い兄に苦境におとしられましたでしたが、それがなければ幸せに暮らしていたはずの女性です。しかしクンティーデーヴィーの場合、子どもたちは長年にわたって次から次へと苦境に落とされました。クンティーの子どもたちは王国をめぐるドゥリヨーダナとその一族に苦しめられましたが、そのたびにクリシュナに助けられました。ビーマが菓手に毒を盛られたり、蟻(ろう)のできた家に入れられて放火されたり、ドウラウパディー女王は人のまえでクル家の邪悪な一味に裸にされそうになる侮辱を受けたりしました。主はこのとき、尽きることのない布をドウラウパディーに送って救いの手をさしのべ、結局ドゥリヨーダナたちはかのじよの裸を見ることができませんでした。同じように、兄弟が森に追放されたとき、ビーマは人喰族のヒディンバー・ラークシャサと戦いをまじえましたが、主がビーマを助けました。一難去ってまた一難——このような艱難辛苦のあとにクルクシェートラの戦いが待ちうけ、アルジュナは、ドゥローナ、ビーシュマ、カルナなど、恐るべき戦士と剣を交える定めがありました。そしてついに、すべてが終わったと思われるとき、ドゥローナーチャーリヤの息子がウッターラーの胎児を殺すために放ったブラフマーストラが襲いかかり、そして主は、クル家のただひとりの子孫、マハーラージャ・パリークシットを救ったのでした。

第 2 5 節

विपदः सन्तु ताः शश्वत्त्र तत्र जगद्गुरो ।
भवतो दर्शनं यत्स्यादपुनर्भवदर्शनम् ॥ २५ ॥

ヴィパダハ サントウ ターハ シヤシュヴァトウ
vipadaḥ santu tāḥ śaśvat

タトウラ タトウラ ジャガドウ・グロー
tatra tatra jagad-guro

バハヴァトー ダルシャナンム ヤトウ シャードウ
bhavato darśanam yat syād

アプナル バハヴァ・ダルシャナンム
apunar bhava-darśanam

vipadaḥ—災難; *santu*—起こるように; *tāḥ*—すべて; *śaśvat*—繰り返し; *tatra*—そこに; *tatra*—そしてそこに; *jagat-guro*—おお、宇宙の主よ; *bhavataḥ*—あなたの; *darśanam*—会うこと; *yat*—～であるもの; *syāt*—～である; *apunaḥ*—繰り返さない; *bhava-darśanam*—誕生と死の繰り返しを見ること。

私は、このような災難が何度も繰り返しかえし起こることを願っています。そのたびにあなたを見ることができるからです。あなたを見るということは、誕生と死の繰り返しかえしには直面しない、ということなのです。

要旨解説

一般的に、苦しむ人・貧しい人・知性のある人・探求心の強い人たちのなかで、善良なおこないをする人々は神を崇拜したり、あるいは崇拜をはじめようとしたりします。いっぽう悪事で成功している人々は、どのような地位をあっても、幻想エネルギーに翻弄されているために至高者に近づくことはできません。ですから、善良な人がある災難に遭遇した場合、主の蓮華の御足に救いを求めるほかに道はありません。主の蓮華の御足をいつも心に思うことは、誕生と死からの救いの準備をしている、ということです。ですから、いわゆる災難とされる状況に置かれても、敬虔な人たちはそれを喜んで迎えます。その機会が主を思いだす機会を与え、そのことが解放につながるからです。

無知の海を渡る最適な船である主の蓮華の御足に身をゆだねた人は、子ウシのひづめの足跡ほどの穴を飛びこえるほどかんたんに、解放を達成することができます。そのような人こそ主の住居に住む資格があり、歩くたびに危険が待ちうけている物質界とはなんの関係もありません。

主は『バガヴァッド・ギーター』で、物質界は災難だらけの危険な場所、と断定してい

ます。知性に欠ける人は、物質界が災難に満ちている現実を知らずに、いろいろな計画をたてて災難から逃れようとしています。至福にあふれた、災難のない主の住居のことも知りません。ですから正気の人なら、どのような状況でもかならず起こる物質界の災難に心を乱されることはありません。避けられない不運に苦しめられつつも、私たちは精神的悟りを求めて進まなくてはなりません。それが人間生活の使命なのです。精神魂そのものは、どのような物質的な災難にもかかわっていません。ほんとうは災難などないのです。夢でトラに呑みこまれそうになってその恐怖に絶叫する。しかしじつは、トラもいなければ、その苦しみもない——ただの夢ですから。同じように、人生にある災難はどれも夢です。献愛奉仕をとおして主とふれあえる幸運な人にはすべてが利益となります。9種類の献愛奉仕の1つでさえも、主と接触できるのであれば、いつでも、それは神のもとに帰る道を1歩進んだことになるのです。

第26節

जन्मैश्वर्यश्रुतश्रीभिरेधमानमदः पुमान् ।
नैवार्हत्यभिधातुं वै त्वामकिञ्चनगोचरम् ॥ २६ ॥

ジャンマイシュヴァリヤ・シュルタ・シュリービヒル
janmaishvarya-sruta-sribhir

エーダハマーナ・マダハ プマーン
edhamāna-madaḥ pumān

ナイヴァールハティ アビダハートウンム ヴアイ
naivārhaty abhidhātum vai

トゥヴァーンム アキンチャナ・ゴーチャランム
tvām akiñcana-gocaram

janma—誕生; *aiśvarya*—富; *sruta*—教育; *sribhiḥ*—美しくあること; *edhamāna*—増大すること; *madaḥ*—陶酔物; *pumān*—その人間; *na*—決して～ない; *eva*—いつまでも; *arhati*—～にふさわしい; *abhidhātum*—気持ちをこめて呼びかけること; *vai*—確かに; *tvām*—あなた; *akiñcana-gocaram*—物質的に絶望している人には容易に近づける人。

主よ。だれでもあなたにかんたんに近づくことができます。しかし、それは物質的に疲れはてた人にかぎります。物質的な暮らしをし、高貴な家柄、莫大な富、高い教育、体の美しさなどを求めている人は、真剣な思いをこめてあなたに近づくことができません。

要旨解説

物質的に高められる、とは、高貴な家系に誕生すること、莫大な富を持つこと、教育や美しい体を持つことを指しています。物中心主義の人はだれでも、そのような富を目指し

て狂奔し、これが物質文化の発展と捉えられます。しかしその結果、物質的美質ゆえに横柄になり、はかない財産に自己陶醉するようになります。陶醉した人間は、心をこめて「おお、ゴーヴィンダ」、「おお、クリシュナ」と主の名前を唱えることはできません。シャーストラで言われているように、1度だけでも主の聖なる名前を唱えた人は、一生かかっても犯すことのできないほどの罪を取りのぞくことができます。それが、主の聖なる名前の唱名の力です。この言葉に誇張はみじんもありません。ほんとうに主の聖なる名前はその力を持っているのです。しかし、唱える質も大切です。それは主を思う強さにかかっています。絶望しきった人は、思いをこめて主の聖なる名前を唱えるものですが、物質的な満足感にどっぷり浸った人に真剣な唱名はできません。尊大になっている人もときには主の聖なる名前を唱えるかもしれませんが、きもちのこもった質の高い唱えかたはできません。ですから、4つの物質的発達、すなわち(1)優れた家柄、(2)すばらしい財産、(3)高い教育、(4)魅力的な容姿などは、いわば、精神的発達の道を進むには失格といえる質です。純粹な精神魂をつつみこんでいる物質は外面的要素であり、病気の熱が健康を害した体に表われるようなものです。最初の処方は解熱であり、体を酷使して熱を上げる処方は勧められません。精神的に高尚でも貧しい人を見かけることがあります。だとしても、それは支障ではありません。逆にその貧しさは、病気の熱がさがることが良い兆候であるように、好ましい条件といえます。生活の原則は、人生の目的をさらに幻惑させる物質的陶醉を鎮めることにあります。完全に惑わされている人は、神の国に入る資格はありません。

第27節

नमोऽकिञ्चनवित्ताय निवृत्तगुणवृत्तये ।
आत्मारामाय शान्ताय कैवल्यपतये नमः ॥ २७ ॥

ナモー キンチャナ・ヴィッターヤ
namo 'kiñcana-vittāya

ニヴリッタ・グナ・ヴリッタイエー
nivṛtta-guṇa-vṛttaye

アートウマラーマーヤ シャーンターヤ
ātmārāmāya śāntāya

カイヴァリヤ・パタイエー ナマハ
kaivalya-pataye namaḥ

namaḥ—あなたにあらゆる敬意を払います; *akiñcana-vittāya*—物質的に困窮している者の財産である方に; *nivṛtta*—物質の様式の活動を完全に超越している; *guṇa*—物質の様式; *vṛttaye*—愛着; *ātma-ārāmāya*—みずから満足している方; *śāntāya*—もっとも穏やかな方; *kaivalya-pataye*—一元論者の主に; *namaḥ*—ひれ伏すこと。

貧しき者の財産であるあなたに敬意を捧げます。あなたは、自然の物質様式の動・反動にはまったくかわりのない方です。みずから満足されているからこそ、もっとも穏やかで、一元論者の主です。

要旨解説

生命体は、所有物をすべて失ったときにすべてが終わります。ですから「放棄」という言葉のほんとうの意味からみても、全生命体は放棄者にはなれません。生命体は、より価値のあるものを得たときに、持っていたなにかを放棄します。生徒は、より高い教育を受けるために子どもじみた考え方を捨てます。労働者は、もっといい仕事につくために現在の職場を変えます。同じように献愛者も、なんにもならないことのために物質界を放棄するのではなく、精神的価値のあることのために放棄します。シュリーラ・ルーパ・ゴースヴァーミーとシュリーラ・ラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミー、また他の献愛者は、主に仕えるために世間の虚飾や財産を捨てました。世間の目から見れば重要人物とされた人物ばかりです。ゴースヴァーミーたちはベンガル政府の役職にあり、シュリーラ・ラグナータ・ダーサ・ゴースヴァーミーは、当時の有力な地主（ザミンダー）の子息でした。それでも、はるかに優れたものを得るためにそれまで所有していたものすべてを捨てたのです。献愛者には財産などないのがふつうですが、じつは主の蓮華の御足のなかに秘密の宝箱をもっています。そのことを如実にしめす話があります。シュリーラ・サナータナ・ゴースヴァーミーは試金石をもっていました、それをごみくずのなかに置いていました。ある貧しい人がそれを持ちさったのですが、よく考えてみると、このような価値のある石がなぜどうでもいい場所に放っておかれていたのか不思議でなりません。そこで男性はなにが一番価値あるものか尋ね、そしてゴースヴァーミーに主の聖なる名前を授かりました。アキンチャナ (Akiñcana) は、物質的なものをいっさい与えない者、という意味です。ほんものの献愛者・マハートマー (mahātma) は、すでに物質的財産をすべて放棄しているため、だれにも物質的なものは授けません。しかし、もっともすばらしい財産である人格主神をあたえることができます。なぜなら、人格主神こそが、ほんものの献愛者の所有物だからです。サナータナ・ゴースヴァーミーの試金石はごみくずのなかに捨てられていましたが、ゴースヴァーミーの所有物ではありませんでした。でなければ、そのような場所に放っておかれるはずがありません。この特別な例が初心の献愛者に教えられるのは、物質的欲望と精神的発達とは両立しないことを確信させるためです。すべてを至高主と結びつけられない人は、いつも精神と物質を区別して見ているはずで、シュリーラ・サナータナ・ゴースヴァーミーのような精神指導者は、すべてを精神的なものとして見られる人物ですが、私たちにはその視野がないため、このような例を私たちにしめたのでした。

物質的視野や文化を高めることは、精神的な発達には大きな障害となります。物質的発

達は、生命体をあらゆる苦しみの原因である肉体にしばりつけます。そのような発達をアナルタ (anartha) 「不要な物事」といいます。これは事実です。物質的に発達した昨今、50セントのリップクリームを使いますが、物質的生活観念から作りだされたそのような不要なものがたくさんあります。私たちのエネルギーは、不要な物事に関心が向けられることで、なによりも大切な精神的悟りを得ることなくすり減らされます。月に行こうとする試みも、エネルギーの無駄の一例です。月に行っても人生の問題はそのままだからです。主の献愛者をアキンチャナ (akiñcana) といいますが、それは、かれらが物質的な財産を持っていないからです。物質的財産は物質自然の三様式から作りだされます。精神的エネルギーをだいなしにする物質的財産は、持っている物質自然の産物が少ないほど、精神的に高められる優れたチャンスがあるということです。

至高人格主神がすることは、物質的な行動とはなんの関係もありません。主がすることはすべて、たとえ物質界のなかであっても精神的であり、物質自然の様式に対する感情はありません。『バガヴァッド・ギーター』で主が言っているように、主の行動はすべて、物質界の外であろうと中であろうと超越的であり、この事実を完璧に知っている人物は、物質界に二度と生まれることはなく、神のもとに帰っていきます。

物質的病は、物質自然を支配しようとする望みのためにおこります。この望みは自然の三様式の作用によるもので、主も献愛者もそのようないつわりの楽しみには執着していません。ですから、主と献愛者は *nivṛtta-guṇa-vṛtti* (ニヴリッタ・グナ・ヴリッティ) と呼ばれます。主は自然の様式に惹かれませんが、生命体にはその傾向があるからです。完璧なニヴリッタ・グナ・ヴリッティは至高主です。生命体の一部は、物質自然の幻想の魅力に囚われています。

主は献愛者の財産であり、献愛者は主の財産でもあるため、献愛者はまちががなく物質自然の様式を超越しています。それは当然な結論です。無垢な献愛者は、苦しみや貧困から逃れたり探求心や推論のために主を求めたりする混ぜ合わせの献愛者とは違います。純粹な献愛者と主は、神聖な心で互いに結ばれています。主はそれ以外の人々とはかかわらない、アートマーラーマ (*ātmārāma*)、みずから満足している者、と呼ばれます。主はみずから満足している方であるため、主と一体化しようとする一元論者の主人でもあります。一元論者は、ブラフマジョーティ (*brahmajyoti*) という主の体からの光に溶けこもうとしています。いっぽう、献愛者は主の崇高な娯楽のなかに入ります。崇高な娯楽を俗な楽しみと捉えてはなりません。

第28節

मन्ये त्वां कालमीशानमनादिनिधनं विभुम् ।
समं चरन्तं सर्वत्र भूतानां यन्मिथः कलिः ॥ २८ ॥

マニエー トウヴァーンム カーランム イーシャーナンム
manye tvām kālam īśānam

アナーディ・ニダハナンム ヴィブフム
anādi-nidhanam vibhum

サマンム チャランタンム サルヴァトウラ
samam carantam sarvatra

ブフターナーナム ヤン ミタハハ カリヒ
bhūtānām yan mithaḥ kaliḥ

manye—私は考える；*tvām*—あなた；*kālam*—永遠なる時；*īśānam*—至高主；*anādi-nidhanam*—始まりも終わりもなく；*vibhum*—遍在する；*samam*—同じく平等に；*carantam*—分け与えている；*sarvatra*—どこでも；*bhūtānām*—生命体たちの；*yat mithaḥ*—交流によって；*kaliḥ*—意見の相違。

主よ。私はあなたを、永遠なる時、至高の支配者、始まりも終わりもない方、遍在する方と思っています。ご自分の慈悲を分けあたえることでは、だれにでも平等に授けられません。生命体たちの意見の相違は、世間とのかかわりゆえにおこることです。

要旨解説

クンディーデーヴィーは、クリシュナが自分の甥でも、また両親の家系に属するありきたりの親族ではないこと、そしてクリシュナが根源の主であり、パラマートマー・超靈魂としてすべての生物の心のうちにいることを熟知しています。主のパラマートマーの姿の別名をカーラ (*kāla*) 「永遠なる時」といいます。永遠の時は私たちの善悪どちらの行為も見ており、その結果としての反動も主によって決定されます。なぜ、なんのために自分は苦しんでいるのかわからない、と言ってもむだなことです。いま苦しんでいる原因である過去の悪業を忘れているかもしれませんが、よく心得ておくべきことは、パラマートマーはいつも私たちと一しょにいるし、だからこそ主は過去・現在・未来のすべてを知っている、という事実です。主クリシュナのパラマートマーの姿が、すべての活動と反動を決定づける方なのですから、主こそが至上の支配者です。主の許しがなければ、たった1枚の葉さえ動くことはできません。生命体は、自分が授かるに足る自由を得ていますが、その自由裁量権をまちがって使うのが苦しみの原因です。主の献愛者は自由をまちがってつかうことはありませんから、主の優れた子どもたちです。それ以外の人たちは、永遠のカーラが決める苦しみに縛られつづけます。カーラは、条件づけられた魂に幸福も苦しみも与えます。すべては永遠なる時によって運命づけられています。余計な苦しみが待ちうけているように、頼んだわけでもない幸福にも出あう。すべてカーラが決定しているからです。ですから、主にとってはだれも敵でも友人でもありません。だれもが、自分の運命

どおりに苦しみ、そして楽しんでいきます。この運命は、世間とのかかわりのなかで生命体が自分で作りだしていきます。だれもが物質自然をあやつりたいと考えていますが、じつは至高主にあやつられながら自分の運命を作っています。主はどこにでもいますから、だれがなにをしようとすべて見ることができます。そして、主は始まりも終わりもない方ですから、永遠なる時、すなわちカーラとしても知られています。

第29節

न वेद् कश्चिद्भगवंश्चिकीर्षित
तवेहमानस्य नृणां विडम्बनम् ।
न यस्य कश्चिद्दयितोऽस्ति कर्हिचिद्
द्वेष्यश्च यस्मिन् विषमा मतिर्नृणाम् ॥ २९ ॥

ナ ヴェーダ カシュチドゥ バハガヴァンムシュ チキールシタンム
na veda kaścīd bhagavaṁś cikīrṣitam

タヴェーハマーナッシャ ヌリナーンム ヴィダナムバナナム
tavehamānasya nṛṇām viḍambanam

ナ ヤッシャ カシュチドゥ ダイトー スティ カルヒチドゥ
na yasya kaścīd dayito 'sti karhicid

ドゥヴェーツシャシュ チャ ヤスミン ヴィシャマー マティル ヌリナーンム
dveṣyaś ca yasmin viṣamā matir nṛṇām

na—しない; *veda*—知る; *kaścīd*—だれも; *bhagavan*—おお、主よ; *cikīrṣitam*—崇高な娯楽; *tava*—あなた; *ihamānasya*—俗な人間のように; *nṛṇām*—一般大衆の; *viḍambanam*—誤解させる; *na*—決して～ない; *yasya*—主の; *kaścīd*—だれでも; *dayitaḥ*—特別の恩寵の対象; *asti*—～がある; *karhicid*—どこにも; *dveṣyaḥ*—嫉妬の対象; *ca*—そして; *yasmin*—主に; *viṣamā*—不公平さ; *matir*—概念; *nṛṇām*—人々の。

主よ。あたかも人間がしているような、そして誤解をまねくようなあなたの崇高な娯楽は、だれにも理解できません。また、だれか特別に好意をしめす相手もいなければ、嫉妬する相手もいません。人々が、あなたが公平ではない、と勝手に想像しているだけです。

要旨解説

主の慈悲は、条件づけられた魂に分けへだてなく授けられています。特に敵対するような相手もいません。人格主神を人間と捉える考え方そのものがまちがっています。主の崇高な娯楽は人間がする娯楽とまったく同じように見えるのですが、物質の穢れがいつさいない神々しい娯楽です。主はたしかに純粋な献愛者にひいきをしますが、じっさいは、太

陽が全生命体に不公平ではないように、主はけっして不公平ではありません。太陽光線を利用すればただの石でさえ価値ある石になりますが、目の見えない人は、あたりに光が広がっているのはわかっても、太陽そのものを見ることはできません。暗闇と光は相反していますが、それでも、太陽は光を不公平に放っているわけではありません。太陽光線はだれをも等しく照らしています、それを受けとる側に違いがあります。愚かな人は、献愛奉仕は主から特別の慈悲を授かるためのへつらい行為だと考えます。しかしじっさいは、主に崇高な愛情奉仕をしている人は、商売をしているものではありません。商売をする人は、代価と交換に客人に奉仕をします。純粋な献愛者は、そのような返礼を期待して主に仕えているわけではありませんから、主のあふれる慈悲が献愛者にそそがれるのです。苦しんでいたり、貧しかったり、探求心のある人や哲学者は、なにかの目的をかなえるために、主と一時的な関係を築きます。しかしその目的がかなうと、主との関係はそれきり終わってしまう。苦しんでいる人は、善良な人なら、立ちなおれるよう主に祈ります。しかし、望みがかなったとたん、ほとんどの場合、苦しんでいたその人は、主との絆など気にならなくなります。主の慈悲はだれにでも用意されています、しかし、ある人は受け入れることをためらいます。それが、純粋な献愛者と混じった思いある献愛者との違いです。主への奉仕をまったく否定する者は救いがたい暗闇のなかにあり、主の恩寵を欲しいときだけ授かろうとする者は主の慈悲を部分的に受けとり、主への奉仕に完全に打ちこんでいる人は、主の慈悲をすべて受けとります。主の慈悲を受けとるそのような違いは、受けとる側が作っているものであり、だれにも慈悲深い主の不公平さによるものではありません。

主があらゆる面で慈悲深いその力をとおして物質界に降誕すると、まるでふつうの人間のように行動するため、主は献愛者だけに好意をしめしているように見えます。でも、それは事実ではありません。一見不公平には見えても、主の慈悲はだれにもわけへだてなくそそがれます。クルクシェートラの戦場で、主がいる同じ場所で戦死した兵士たちは、必要な資格もなかったのに解放の境地に入りました。主のまえで死ぬということは、すべての罪に苦しめられずに他界できるため、死亡した兵士は、崇高な住居のどこかに入ることができます。太陽の光を浴びる人は、熱と紫外線という恩恵を必然的に得ることができます。ですから、結論として「主は決して不公平ではない」と断言できます。一般の人々が、主を不公平な方と考えるのはまちがっています。

第30節

जन्म कर्म च विश्वात्मन्नजस्याकर्तुरात्मनः ।
तिर्यङ्मूषिषु यादःसु तदत्यन्तविडम्बनम् ॥ ३० ॥

ジャンマ カルマ チャ ヴィシュヴァートウマン
janma karma ca viśvātmann

アジャッシャーカルトウル アートウマナハ
ajasyākartur ātmanaḥ

ティリヤン・ヌリーシシュ ヤーダフス
tiryāṅ-nṛīṣiṣu yādaḥsu

タドゥ アテヤンタ・ヴィダンムバナナム
tad atyanta-vidambanam

janma—誕生; *karma*—活動; *ca*—そして; *viśva-ātman*—宇宙の魂よ; *ajasya*—誕生しない方の; *akartuḥ*—活動しない方の; *ātmanaḥ*—生命力である方の; *tiryak*—動物; *nṛ*—人類; *ṛṣiṣu*—聖者たちにおける; *yādaḥsu*—水の中の; *tat*—その; *atyanta*—ほんとうの; *vidambanam*—惑わせている。

宇宙の魂、主クリシュナ。もちろん、これは私たちを惑わせるものです。活動しない方でありながら活動され、生命力の源で、そして生まれながら誕生されているからです。あなたご自身、動物や人類や聖者や水生生物のなかに降誕されます。たしかに、これは私たちを惑わせるものです。

要旨解説

主の崇高な娯楽は、私たちを混乱させるだけではなく、一見矛盾しているようにも見えます。言いかえると、それらはどれも人間の限られた思考力を超えている、ということです。主は万物のなかに遍在する超靈魂として存在していますが、同時に、動物界のなかにイノシシとして現われたり、人間界のなかにラーマやクリシュナなどとして現われたり、ナーラーヤナのようなリシとして、また魚の姿として現われたりします。それでも、主は生まれることのない方とか、なにもすべきことのない方とされています。シュルティ・マントラでは、至高のブラフマンにはなにもすべきことがない、とされています。主に等しい者も、主を超える者も存在しません。主は無数のエネルギーをそなえ、すべては自然に機能する知識、力、活動をとおして主によってなされます。このような表現は、主の活動・姿・行動が私たちの限られた思考力を超えていることを疑いもなく証明していますし、主が想像を絶する力をそなえているからこそ、主にできないことはありません。ですから、だれも主を正確に推測することはできません。主がすることはすべて、俗人を混乱させるだけです。ヴェーダ知識を学んでも主のことはわかりませんが、主と親密に結ばれている純粋な献愛者だけが理解します。ですから献愛者は、主が動物として現われても、その動物でも、あるいは人間でもリシでも魚でもない、ということをよく知っています。主は永久に、どのような状況でも至高主なのです。

第31節

गोप्याददे त्वयि कृतागसि दाम तावद्
या ते दशाश्रुकलिलाञ्जनसम्भ्रमाक्षम् ।
वक्त्रं निनीय भयभावनया स्थितस्य
सा मां विमोहयति भीरपि यद्विभेति ॥ ३१ ॥

ゴープィ アーダデー トウヴァイ クリターガシ ダーマ ターヴァドゥ
gopy ādade tvayi kṛtāgasi dāma tāvad

ヤー テー ダシャーシュル・カリラーンジャナ・サンムプフラマークシャム
yā te daśāśru-kalilāñjana-sambhramākṣam

ヴァクトウラム ニニーヤ バハヤ・バハーヴァナヤー スティタッシャ
vaktram ninīya bhaya-bhāvanayā sthitasya

サー マーンム ヴィモーハヤティ ビヒール アピ ヤドゥ ビベハーティ
sā mām vimohayati bhīr api yad bibheti

gopī—牛飼いの女性（ヤシヨーダー）；*ādade*—つかんだ；*tvayi*—あなたに；*kṛtāgasi*—困ったことをしてかした（バターの容器を壊したことで）；*dāma*—ひも；*tāvat*—そのとき；*yā*—であるもの；*te*—あなたの；*daśā*—状態；*aśru-kalila*—涙にあふれて；*añjana*—膏；*sambhrama*—狼狽して；*akṣam*—目；*vaktram*—顔；*ninīya*—下に；*bhaya-bhāvanayā*—怖がって；*sthitasya*—その状態の；*sā*—それ；*mām*—私を；*vimohayati*—混乱させる；*bhīḥ api*—恐れ of 権化でさえ；*yad*—～である方に；*bibheti*—怖がって。

愛しいクリシュナ。あなたは、いたずらをしたときにヤシヨーダーにひもで縛られました。当惑しきったその目から涙があふれ、まつげ染めが頬をつたいました。恐れ of 権化でさえ恐れるあなたが、それほどこわがっておられたのです。私はこの情景に困惑するばかりです。

要旨解説

この節には、至高主の娯楽が作りだす困惑についてさらに説明されています。すでに説明したように、至高主はどのような状況でも至高の存在です。この節には、主が至高者でありながら同時に純粋な献愛者の目のまえで遊んでいる情景が描写されています。純粋な献愛者は無垢な愛情だけで主に仕えており、奉仕をしているときには至高主の正体をすっかり忘れています。至高主も献愛者から愛情奉仕を受けいれますが、うやうやしく崇められるよりも、純粋な愛情から自然に捧げられる奉仕を深く味わいます。ふだんはかしこまった崇拜を受ける主ですが、献愛者が素朴な愛着や愛をこめて、まるで自分のほうが主よりも立場が上のようにふるまうときのほうが、完全な喜びを味わいます。根源の地ゴープィ

ーカ・ヴリンダーヴァンでの崇高な娯楽は、まさにそのような心情でおこなわれています。クリシュナの友だちは、クリシュナのことを同じ仲間だと思っているのです。いんぎんにたてまつる思いは、まったくありません。主の両親たちは（純粋な献愛者ばかりであり）、主を自分の子どもとしか考えていませんでした。主は、ヴェーダの聖歌よりも、両親から叱られることを喜んで受け入れていました。同じように、ヴェーダの聖歌よりも、恋人に叱られるほうが楽しいと嬉しいと感じます。主は、精神界にある崇高な住居ゴーローカ・ヴリンダーヴァンでの永遠の娯楽をしめすために物質界に降誕し、人々をとりこにしましたが、育ての母親だったヤショーダーの言いなりになる、というたぐいまれな娯楽を見せました。いたずらだった主はバターの入った容器をこわし、友だちや遊び仲間、気前のいい主からおこぼれをもらおうとやってきたヴリンダーヴァンの名高いサルたちに配り、せっかくヤショーダーがたくわえていたバターをめちゃくちゃにすることがありました。それを見たヤショーダーは、純朴な愛情から、神秘的な我が子を叱るふりをしたいと思いました。そしてどこの家庭でも母親がしているように、ひもをつかみ、主をおどかさようなふりをしました。お母さんがにぎっているひもを見て驚いた主は、あやまりながらふつうの子どものように泣きはじめました。美しい目を飾っていた黒いまつげ飾りが涙とともにほほをつたいます。その姿が、主の至高の境地をよく知っていたクンティーデーヴィーによって崇められています。主は恐れの特化にも恐れられる方ですが、ふつうの母親のように叱ろうとしたヤショーダーをこわがりました。クンティーはクリシュナの高貴な立場をよく知っていましたが、ヤショーダーは知りませんでした。ですから、ヤショーダーの境地はクンティーよりも高いと言えます。ヤショーダーは主を我が子として授かり、主は、自分が至高主であることをヤショーダーに忘れさせたのです。ヤショーダーが主の高貴な立場を知っていたら、主を叱ることをためらったはずです。しかしヤショーダーは主のほからいで、我が子が至高主であるとはまったく考えもしませんでした。主は、やさしいヤショーダーのまえであどけない子どもでいたかったのです。母親と子どものこの愛情交換はごく自然に交わされ、クンティーはその情景を思いだしながら、とまどい、その超越的な子の愛情を讃えずにはいられませんでした。クンティーは、たぐいまれな愛情に恵まれたヤショーダーを間接的に讃えています。あらゆる力をそなえた主を、愛する我が子として支配できたのですから。

第32節

केचिदाहुरजं जात पुण्यश्लोकस्य कीर्तये ।

यदोः प्रियस्यान्ववाये मलयस्यैव चन्दनम् ॥ ३२ ॥

ケーチドゥアーフル アジャンム ジャータナム
kecid āhur ajam jātam

プニャ・シュローカッシャ キールタイエー
punya-slokasya kīrtaye

ヤドーホ プリヤッシャーンヴァヴァーイェー
yadoḥ priyasyānvavāye

マラヤッシェーヴァ チャンダナム
malayasyeva candanam

kecit—だれかが；*āhuḥ*—言う；*ajam*—生まれぬ者；*jātam*—生まれて；*punya-slokasya*—信心深い偉大な王の；*kīrtaye*—讃えるために；*yadoḥ*—ヤドゥ王の；*priyasya*—愛しい者の；*anvavāye*—～の華族のなかに；*malayasya*—マラヤ丘；*iva*—～のように；*candanam*—ビャクダンの木。

ある人は、「敬虔な王たちを讃えるために生まれることのない者が生まれる」と表現し、またある人は、「もっとも愛しい献愛者のひとりであるヤドゥ王を喜ばせるために生まれる」と表現しています。あなたは、マラヤの丘にビャクダンの木が現われるように、ヤドゥ王家のなかに現われます。

要旨解説

主が物質界に現われることは不可解に見えるため、この「生まれることのない者」の誕生についてはさまざまな意見があります。『バガヴァッド・ギーター』では、「主は全創造物の主であり、生まれることのない存在ではあるが、物質界に誕生する」と言われています。主自身がその事実を「生まれぬ者が生まれる」と断言しているのですから、だれもそのことは否定できません。それでも、主の誕生についてはさまざまな意見があります。『バガヴァッド・ギーター』でもその事実が説明されています。主は、宗教原則を再確立させるために、そして敬虔な人を守り、邪悪な者を抹殺するために、内的勢力をとおして降誕します。それが、生まれることのない者が降誕する使命です。いっぽう、主は敬虔なユディシュティラ王を讃えるために現れた、とも言われています。主シュリー・クリシュナは、世界中の人々の幸福を願ってパーンダヴァの王国を築きたいと思っていました。敬虔な王が世界を治めれば、人々は幸せになれるのです。ところが、統治者が邪悪な心をもっていればだれも幸福になれません。カリ時代では、ほとんどの統治者の心は敬虔ではなく、そのために国民も不幸な生活を強いられています。しかし民主主義では、不敬虔な国民が自分たちを導く代表者を選んでいるのですから、自分たちの不幸を人のせいにはできないはずで、マハーラージャ・ナラも敬虔で偉大な王として知られていましたが、主クリシュナとは関係がありませんでした。ですから、この節で主クリシュナに讃えられているのはマハーラージャ・ユディシュティラです。主はヤドゥ王も讃えました。主が同じ家

系に誕生しているからです。主は、家族間の義理にしばられる方ではありませんが、ヤーダヴァ、ヤドゥヴィーラ、ヤドゥナンダナなどの別名でも知られています。たとえば、マラヤの丘に生えているジャクダンの木です。木はどこにでも生えますが、ジャクダンはずほとんどがマラヤの丘一帯に育つため、ジャクダンという名前とマラヤの丘はつながりがあります。太陽は生まれることのない存在ではあるが、なおかつ東の地平線に姿を見せる。主の降誕も同じである——これが結論です。東の地平線に昇る太陽を「東の地平線の太陽」と限定できないように、主はだれの息子でもありません。しかしなおかつ、存在するものすべての父親でもあります。

第33節

अपरे वसुदेवस्य देवक्यां याचितोऽभ्यगात् ।
अजस्त्वमस्य क्षेमाय वधाय च सुरद्विषाम् ॥ ३३ ॥

アパレー ヴァスデーヴァッシャ
aṣare vasudevasya

デーヴァキヤーンム ヤーチトー ジャガートウ
devakyām yācito 'bhyagāt

アジャス トウヴァンム アッシャ クシェーマーヤ
ajas tvam asya kṣemāya

ヴァダハーヤ チャ スラ・ドゥヴィシャーンム
vadhāya ca sura-dviṣām

aṣare—他の者たち; *vasudevasya*—ヴァスデーヴァの; *devakyām*—デーヴァキーの; *yācitaḥ*—～のための祈りを受けて; *abhyagāt*—誕生した; *ajaḥ*—生まれぬ; *tvam*—あなたは; *asya*—彼の; *kṣemāya*—幸福のために; *vadhāya*—殺す目的で; *ca*—そして; *sura-dviṣām*—半神を妬んでいる者たちの。

それ以外にも、ヴァスデーヴァとデーヴァキーがあなたに祈ったからこそ、ふたりの子息としてあなたは誕生した、という人たちがいます。あなたが生まれぬ方であることに疑いの余地はありませんが、それでもふたりの幸せのために、そして半神を妬んでいる者たちを葬りさるために誕生されます。

要旨解説

ヴァスデーヴァとデーヴァキーのことでは、前世でスタパーとプリシュニという夫婦だったときに、主を息子として授かるためにきびしい苦行をし、その結果として主が息子として誕生したと言われていました。『バガヴァッド・ギーター』が宣言しているように、主

は世界中の人々が幸せにするために、そしてアスラ・物質主義的な無神論者を破滅させるために降誕します。

第34節

भारवतारणायान्ये भुवो नाव इवोदधौ ।
सीदन्त्या भूरिभारेण जातो ह्यात्मभुवार्थितः ॥ ३४ ॥

バハラーヴァターラナーヤニエー
bhārāvātāraṅāyānye

ブフヴォー ナーヴァ イヴォーダダハウ
bhuvo nāva ivodadhau

シーダンチャー プーリ・バハレーナ
sīdantya bhūri-bhāreṇa

ジャートー ヒ アートウマ・ブヴァールティタハ
jāto hy ātma-bhuvārthitaḥ

bhāra-avatāraṅāya—世界の苦悩を減らすためだけに; *anye*—他の者たち; *bhuvah*—世界の; *nāvah*—船; *iva*—~のような; *udadhau*—海上の; *sīdantyaḥ*—苦しんで; *bhūri*—極度に; *bhāreṇa*—その苦悩によって; *jātaḥ*—あなたは生まれた; *hi*—確かに; *ātma-bhuvā*—ブラフマーによって; *arthitaḥ*—~の祈りをうけて。

さらに、波のなすがままに船が翻弄されるように世界の人々が苦しんでいたために、そしてあなたの子であるブラフマーが祈ったから、この混乱を減少させるために降誕した、と言う人々もいます。

要旨解説

世界が創造された直後に誕生した最初の生命体ブラフマーは、ナーラーヤナの子です。ナーラーヤナは、ガルボーダカシャーイー・ヴィシュヌとして最初に物質宇宙に入りました。物体そのものは、生命体という精神と接触しなければ別の物体を作ることはできません。この原則は、宇宙創造の始まりからつづいています。至高の精神が宇宙に入り、ヴィシュヌの超越的腹部から出ている蓮華の花の上に最初の生命体ブラフマーが誕生しました。そのため、ヴィシュヌはパドゥマナーバ (Padmanābha) という名前でも知られています。ブラフマーにはアートウマ・ブー (*ātma-bhū*) という別名がありますが、それは、母親であるラクシュミーではなく父親から直接生まれたことにちなんでいます。ラクシュミーはナーラーヤナのそばで仕えていましたが、それでも、ナーラーヤナはラクシュミーといっさい接触することなくブラフマーをもうけました。それが主の全能の力をしめしています。ナーラーヤナとふつうの生命体を一緒にして考える愚かな人は、この事実

から教訓を学ばなくてはなりません。ナーラーヤナはふつうの生命体ではありません。人格主神自身であり、自分の超越的な体の各部分すべてが、あらゆる感覚の力をそなえています。ふつうの生命体は性交渉をとおして子どもをもうけますが、運命で定められた以外の子どもを得ることはできません。しかしナーラーヤナは全能ですから、どのような力の条件にも左右されません。主は完全無欠で、さまざまな力を使ってなににも拘束されずに、かんたんにそして完璧に物事を実現できます。ですから、ブラフマーは父親から直接生まれた子供であり、母親の胎内に入れられたわけではありません。その理由でアートウマ・ブーと呼ばれています。ブラフマーは、全能者の力を二次的に与えられて宇宙のさらなる創造を託されました。宇宙に広がる光のなかには、シュヴェータドゥヴィーパ(Svetadvīpa)という神聖な惑星があり、至高主のパラマートマーの様相であるクシーローダカシャーイー・ヴィシュヌが住んでいます。宇宙の管理をつかさどっている半神たちに解決できない問題が発生したときには、半神たちがブラフマーに解決策を仰ぎ、ブラフマーにも解決できないときは、ブラフマーが、クシーローダカシャーイー・ヴィシュヌに化身となって降誕し、問題を解決するよう救いを求めます。カムサや他の悪漢たちが地球を支配していたときにそのような問題が生じ、そのアスラたちの悪行のために地球に大きな負担がかかっていました。ブラフマージーは他の半神たちとクシーローダカ海の浜辺で祈りを捧げ、クリシュナがヴァスデーヴァとデーヴァキーの子として生まれるという言葉を授かりました。この理由から、主はブラフマージーの祈りを受けて降誕した、とされています。

第35節

भवेऽस्मिन् चि श्यमानानामविद्याकामकर्मभिः ।
श्रवणस्मरणार्हाणि करिष्यन्निति केचन ॥ ३५ ॥

バハヴェー スミン クリッシャマーナーナーンム
bhave 'smin kliśyamānānām

アヴィデヤー・カーマ・カルマビヒヒ
avidyā-kāma-karmabhiḥ

シュラヴァナ・スマラナールハーニ
śravaṇa-smaraṇārḥāṇi

カリッシャナン イティ ケーチャナ
kariṣyan iti kecana

bhave—物質創造界において; *asmin*—この; *kliśyamānānām*—～で苦しんでいる人々の; *avidyā*—無知; *kāma*—望み; *karmabhiḥ*—果報的活動をすることで; *śravaṇa*—聞くこと; *smaraṇa*—思いだすこと; *arḥāṇi*—崇拜すること; *kariṣyan*—実践できる; *iti*—そのように; *kecana*—他の人々。

さらに、あなたの降誕を、献愛奉仕の「聞き、思いだし、崇拜する」といった献愛奉仕の原則を復活させ、苦境にいる条件づけられた魂がその教えを利用し、解放を達成できるように降誕した、と説明する人たちもいます。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』で主は、宗教の道を再確立させるためにすべての創造期に現われる、と断言しています。宗教は至高主が作るものです。新しい宗教など、良からぬ企みを持つ者たちがでっちあげていますが、じっさいはだれにも作れません。宗教のほんとうの道は、主を至上の権威者として受け入れること、そして自然に起こる愛情から主に仕えることにあります。生命体には「仕えること」以外に道はありません。そのために生きているのです。生命体が持つ唯一の気質は主に仕えることです。主は偉大な方であり、生命体は主に従う立場にあります。主に仕えることだけが私たち生命体の義務なのです。不運なことに、幻惑された生命体は「誤解」というたった一つの原因で、物質的望みに駆られて感覚の召使いになっています。この望みをアヴィデヤー (avidyā)、無知といいます。そのような望みにあやつられた生命体は、倒錯した性生活を中心とした楽しみを味わうためにさまざまな計画をたてています。そのために、至高主の管理のもとで、さまざまな惑星のさまざまな肉体に入り、生と死の鎖にからまっています。ですから、この無知の領域を超えなければ、物質生活の3重の苦しみから抜け出すことはできません。それが自然の法則です。

しかし主はいわれのない慈悲心から、聞き、唱え、思いだし、仕え、崇拜し、祈り、主と協力し、主に仕えるという献愛奉仕の原則を復活させるために生命体たちのまえに現われます。なぜなら主は、苦しんでいる生命体が望むよりもっと深い慈悲心を持っている方からです。これらの方法をすべて、あるいはひとつでも実践すれば、条件づけられた魂は無知の束縛から抜け出すことができ、その結果、外的勢力に惑わされた生命体が自分で作りあげているすべての苦しみから解放されます。この慈悲こそ、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブとして降誕した主によって生命体に授けられるものなのです。

第36節

शृण्वन्ति गायन्ति गृणन्त्यभीक्षणशः
स्मरन्ति नन्दन्ति तवेहितं जनाः ।
त एव पश्यन्त्यचिरेण तावकं
भवप्रवाहोपरमं पदाम्बुजम् ॥ ३६ ॥

シュリンヴァンティ ガーヤンティ グリナンティ アビヒークシュナシャハ
śṛṅvanti gāyanti gṛṅnanti abhīkṣṇaśaḥ

スマランティ ナندانティ タヴェーヒタンム ジャナーハ
smaranti nandanti tavehitam janāḥ

タ エーヴァ パッシャンティ アチレーナ ターヴァカンム
ta eva paśyanty acireṇa tāvakam

バハヴァ・プラヴァーホーパラマンム パダーンムブジャンム
bhava-pravāhoparamam padāmbujam

śṛṅvanti—聞く; gāyanti—唱える; grṇanti—受けとる; abhikṣṇasāḥ—つねに;
smaranti—思い出す; nandanti—喜びを感じる; tava—あなたの; ihitam—活動;
janāḥ—一般大衆; te—彼らは; eva—確かに; paśyanti—見ることができる; acireṇa—す
ぐに; tāvakam—あなたの; bhava-pravāha—再び誕生することの流れ; uparamam—停
止; pada-ambujam—蓮華の御足。

おおクリシュナ。あなたの神々しい活動について聞き、繰り返し語る人々、あるいは
同じことを他の人々がしているのを見て喜びを感じる人々は、まちがいなく、誕生と死の
繰り返しを止めるあなたの蓮華の御足を見つめています。

要旨解説

至高主シュリー・クリシュナは、いま私たちが置かれている条件づけられた状態で見
ることはできません。主を見るには、いままで持っていなかった主への自然な愛情をはぐ
むことで、新しい見る力を得なくてはなりません。シュリー・クリシュナが地球にいたこ
ろ、だれもが主を至高人格主神として見ていたわけではありません。ラーヴァナ、ヒラニ
ヤカシプ、カムサ、ジャラーサンダ、シシュパーラのような物質主義者は、獲得した財産
からすれば高い段階にあるかもしれませんが、主の存在を認めませんでした。ですから、
主が私たちの目のまえにいても、必要な眼識がなければ、主の正体を見ることはで
きません。この資格は献愛奉仕だけによって高めることができ、その奉仕は正しい情報源
から主について聞くことから始まります。『バガヴァッド・ギーター』は、多くの人に
知られ、聞かれ、唱えられ、復唱されている名高い書物ですが、その教えを聞いたりして
いるのに、主と巡りあえないことがあります。その理由としてあげられるのは、1 番目の
方法であるシュラヴァナ (śravaṇa) の仕方に問題があるということです。ただし情報源
から聞けば、その効果はすぐに現われます。ふつう、ほとんどの人は正しい権限のない人
から話を聞いています。学術的知識の豊富な人物だとしても、正しい権威に従っていない
人は献愛奉仕の原則に従っていないため、その人物から聞いても時間の無駄にすぎません。
原文が、自分の都合のいいように流行に合わせて変えられることもあります。ですから、
まず資格のある正しい語り手を選ぶのが第一条件であり、その条件が満たす人から話を聞
くことができます。聞く方法が100パーセント完璧なら、当然、その他の手段も正しくおこ

なわれます。

主はさまざまな崇高な活動をしめしていますが、聞く手段が完璧であれば、その活動の一つひとつが望ましい結果を授ける力をそなえています。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、主とパーンダヴァ兄弟たちのかかわりから話がはじまります。ほかにも、主がアスラやその他の多くの人々とかかわる娯楽が述べられています。そして第10編では、主が恋愛感情をわかちあっていたゴーピーたちとの崇高な関係について、またドウヴァーラカーで結婚した妻たちとの話も述べられています。主は絶対的な方ですから、主がすることはすべて超越的です。しかしときに人々は、まちがった手段をとおして聞くために、ほかの話よりも主のゴーピーたちとの関係に興味をいだきます。その心には不埒な感情が含まれており、主の行動を正しく語る人物は、そのような話を聞くことにふけることはありません。主については、『シュリーマド・バーガヴァタム』や他の経典をとおして最初から順序正しく聞くべきであり、その結果、聞き手は徐々に高められて完璧な境地に辿りつくことができます。ですから、主のパーンダヴァたちと関係を、ゴーピーたちとの関係と比べてそれほど重要ではないと考えてはなりません。主は俗な執着心を超えた方である、ということをつねに覚えておくべきです。このような主と献愛者たちのかかわりのなかで、主はいつでも英雄であり、主について、主の献愛者について、あるいは主と戦った人々について聞くことで精神生活は高められていきます。ヴェーダやプラーナなどは、私たちが失ってしまった主との絆を取りもどすためにあります。そのような経典をすべて聞くことが、なによりも大切なことなのです。

第37節

अप्यद्य नस्त्वं स्वकृतेहित प्रभो
जिहाससि स्वित्सुहृदोऽनुजीविनः ।
येषां न चान्यद्भवतः पदाम्बुजात्
परायणं राजसु योजितांहसाम् ॥ ३७ ॥

アピ アデヤ ナス トウヴァンム スヴァ・クリテーヒタ プラボホー
apy adya nas tvam sva-kṛtehita prabho

ジハーサシ スヴィトウ スフリドー ヌジーヴィナハ
jihāsasi svit suhṛdo 'nujīvinah

イエーシャーナム ナ チャーニヤドゥ バハヴァタハ パダーナムブジャートウ
yeṣāṁ na cānyad bhavataḥ padāmbujāt

パラヤナンム ラージャス ヨージターンムハサーナム
parāyaṇaṁ rājasu yojitāṁhasām

api—もし; *adya*—今日; *naḥ*—私たち; *tvam*—あなた; *sva-kṛta*—みずから実行した;

ihita—すべての義務; prabho—主よ; jihāsasi—捨て去っている; svit—もしや; suhrdaḥ—親密な友人たち; anujīvinah—~の慈悲にすがっている; yeṣām—~である人の; na—でもない; ca—そして; anyat—ほかのだれか; bhavataḥ—あなたの; pada-ambujāt—蓮華の御足から; parāyaṇam—頼っている; rājasu—王たちに; yojita—従事している; amhasām—敵意。

愛しい主よ。あなたはご自分の義務をみずから遂行されました。もしや、あなたの慈悲にすがることのない私たちを、だれも守ってくれる者のいない私たちを、そしてすべての王らが私たちに敵意を剥きだしにしているいま、私たちが置いて行ってしまうのではないのですか。

要旨解説

パーンダヴァ兄弟たちはとても幸運です。すべてを主の慈悲にまかせ、そして幸運に恵まれていたからです。物質界では、だれかの慈悲に頼ることは不運の兆しですが、主との超越的な関係においては、主に頼りきって生きるのはこのうえなく幸運なことです。物質的な病は、あらゆることで気ままに生きようとすることに原因があります。しかし冷酷な物質自然界は、私たちが自由奔放に生きることを許してくれません。自然の厳格な法則から逃げようとする試みは、経験的知識を土台にした物質的発達にすぎません。物質界全体が、自然の法則から逃げようとするまじがった試みで動いています。天上の惑星に達する階段を作ろうとしたラーヴァナから現代人にいたるまで、だれもが自然の法則を克服しようとしています。いまでは、科学者たちが機械技術を使って遠く離れた天体に行こうとしています。しかし、人間文化の最上の目標は、主に導かれながら力のかぎり働き、そして主にすべてをまかせることにあります。完璧な文化という最上の到達点は、勇敢に働くことで達成されますが、同時に完全に主を頼って働くことも必要です。パーンダヴァたちはこの基本的文化を実践した模範となる人々です。かれらが主シュリー・クリシュナのすばらしい意志に頼りきっていたことはまちがいありませんが、主に寄生している怠惰な人間だったわけではありません。すばらしい人格を持ち、正しい行動をする持つ人々でした。それでも、生命体は本来なにかに依存するものであることを知っていたからこそ、いつも主の慈悲を求めていました。ですから、人生の完成とは物質界に頼るのではなく、主の意志にすがることにあります。主から離れようとするまじがった人々をアナータ (anātha)、保護者のいない者、といいますが、主の意志に頼りきっている人々をサナータ (sanātha)、守ってくれる人がいる者、といいますが、ですから私たちはサナータになる努力をすべきであり、そうすることで物質存在の逆境からいつでも守られます。物質自然の力に惑わされた私たちは、物中心に生きる生活は望ましくない混乱状態であることを忘れてしまいます。ゆえに『バガヴァッド・ギーター』(第7節・第19節)は、幾度となく誕生を経たあと、

ひとりの幸運な人物がヴァースデーヴァがすべてであるという事実にめざめ、そして一生を正しく過ごす最善の方法は主に完全に身をゆだねることである、という事実を私たちに教えてくれます。その事実を知っている人がマハートマー (mahātmā) です。パーンダヴァ家の人々はすべて世帯者として生きていたマハートマーです。マハーラージャ・ユディシュティラはその筆頭者で、クンティーデーヴィー女王はその母親でした。ですから、『バガヴァッド・ギーター』とすべてのプラーナ、とくに『バーガヴァタ・プラーナ』の教えは、パーンダヴァ・マハートマーたちの歴史と必然的に関係があります。パーンダヴァたちにとって、主と離ればなれになるのは、魚が水のなかから出されるに等しいものです。ですからシュリーマティー・クンティーデーヴィーは、そのような別れを雷に打たれたように感じました。女王の祈りはすべて、主が自分たちといつまでもいてくれるよう思いとどませようとする願いなのです。クルクシェートラの戦争が終わったあと、敵意をもつ王たちはすべて殺害されましたが、その子どもや孫たちがパーンダヴァたちと対決しようとしていました。敵視される状態にいるのはパーンダヴァたちだけではありません、私たちはだれでも、いつでもそのような状態にあります。最善の策は、主の意志に頼りきることであり、そうすることで、物質存在にあるすべての困難を克服することができるのです。

第38節

के वयं नामरूपाभ्यां यदुभिः सह पाण्डवाः ।
भवतोऽदर्शनं यर्हि हृषीकाणामिवेशितुः ॥ ३८ ॥

ケー ヴァヤンム ナーマ・ルーパービヤーンム
ke vayanṁ nāma-rūpābhyāṁ

ヤドゥビヒヒ サハ パーンダヴァーハ
yadubhiḥ saha pāṇḍavāḥ

パハヴァトー ダルシャナンム ヤルヒ
bhavato 'darśanam yarhi

フリシーカーナーンム イヴェーシトウフ
hṛṣīkāṇām iveśituḥ

ke—～である者たちは; vayan—私たち; nāma-rūpābhyāṁ—名声も力もなく; yadubhiḥ—ヤドゥ家とともに; saha—～とともに; pāṇḍavāḥ—そしてパーンダヴァ家; bhavataḥ—あなたの; adarśanam—不在; yarhi—あたかも; hṛṣīkāṇām—感覚の; iva—のような; īsituḥ—生命体の。

ある肉体の名前も名声も、そのなかにいた魂が去った瞬間に終わるように、もし、あなたが私たちを見守ってくださらなければ、私たちの名声も行動も、パーンダヴァ家とヤドゥ家とともにあつというまに消滅することでしょう。

要旨解説

クンティーデーヴィーは、パーンダヴァ家の存在がシュリー・クリシュナだけに支えられていることをよく知っていました。パーンダヴァ家は確かに優れた名前や名声に支えられていましたが、それは道德の権化である偉大なユディシュティラ王に導かれていたからです。ヤドウ家も優れた朋友でしたが、主クリシュナの導きがなければ、両家とも取るに足らない存在であり、それは意識の導きがなければ肉体の感覚は動かないことに似ています。人望・権力・名声などは、至高主の恩寵に導かれていなければ誇れるものではありません。生命体はいつも依存する立場にあり、その依存の究極の相手は至高主です。ですから、物質的知識を高めることで物質資源をすべて補えるほどのなにかを発明できるかもしれませんが、主の導きがなければ、どれほど強力で頑丈な物質を作ろうとしても失敗するに決まっています。

第39節

नेयं शोभिष्यते तत्र यथेदानीं गदाधर ।
त्वत्पदैरङ्किता भाति स्वलक्षणविलक्षितैः ॥ ३९ ॥

ネーヤンム ショービヒッシャテー タトウラ
neyam śobhiṣyate tatra

ヤテヘーダーニーンム ガダーダハラ
yathedānīm gadādhara

トゥヴァトウ・パダイル アンキター パハーティ
tvat-padair aṅkitā bhāti

スヴァ・ラクシャナ・ヴィラクシタイヒ
sva-lakṣaṇa-vilakṣitaiḥ

na—ではない; *iyam*—私たちのこの王国の土地; *śobhiṣyate*—美しく見えるでしょう; *tatra*—そのとき; *yathā*—今のとおりに; *idānīm*—どのように; *gadādhara*—おおクリシュナ; *tvat*—あなたの; *padaiḥ*—御足によって; *aṅkitā*—印されて; *bhāti*—まばゆく輝いている; *sva-lakṣaṇa*—あなたご自身の印; *vilakṣitaiḥ*—印によって。

おおガダーダラ（クリシュナ）。いま私たちの王国の大地は、あなたの蓮華の御足の印に飾られ、美しく見えます。でも、あなたが去ってしまえば、その美しさも消えうせてしまうことでしょう。

要旨解説

主の御足には、他の生命体とは異なる特別の印が刻まれています。旗、雷、象を操る道

具、傘、蓮華、輪などが主の御足の裏に刻まれているのです。この印は、主が柔らかい土地を歩くところに印されていきます。ハスティナープラ (Hastināpura) の大地には、主シユリー・クリシュナがパーンダヴァたちと暮らしていたときにこのマークが印されており、パーダンヴァ家の王国はこうして吉兆な印によって繁栄していたのでした。クンティエーデーヴィーは、このすばらしい特質について語り、主が去ったあとに待ち受けている悲運を恐れています。

第40節

इमे जनपदाः स्वृद्धाः सुपक्वौषधिवीरुधः ।
वनाद्रिनद्युदन्वन्तो ह्येधन्ते तव वीक्षितैः ॥ ४० ॥

イメー ジャナ・パダーハ スヴリッダハーハ
ime jana-padāḥ svṛddhāḥ

スパクヴァウシャディ・ヴィールダハハ
supakvausaḍhi-vīrudhāḥ

ヴァナードウリ・ナディ・ウダンヴァントー
vanādri-nady-udanvanto

ヒ エーダハンター タヴァ ヴィークシタイヒ
hy edhante tava vīkṣitaiḥ

ime—これらすべて; *jana-padāḥ*—都市や町; *svṛddhāḥ*—繁栄して; *supakva*—自然; *auṣadhi*—薬草; *vīrudhāḥ*—野菜; *vana*—森; *adri*—丘; *nadī*—川; *udanvantaḥ*—海; *hi*—確かに; *edhante*—増えている; *tava*—あなたによって; *vīkṣitaiḥ*—見られて。

この国の都市や町はあらゆる面で繁栄しています。それは薬草や穀物が豊かに実り、木々が果実をたわわに実らせ、川がよどみなく流れ、丘が多量の鉱物に恵まれ、海に富があふれているからです。これは、あなたがそれらにまなざしを向けたからにほかなりません。

要旨解説

人類の繁栄は自然からの贈り物によって実現するものであり、巨大な産業都市によるものではありません。大がかりな工業施設は無神論文化の産物であり、人類のためにある崇高な目標を台無しにする原因になります。人間の活力をしばりとするそのようなやっかいな工場がふえるにつれ、一部の人間がその搾取によって私腹を肥やし、一般市民はますます不安と不満に苦しめられます。穀物や野菜、果物、皮、宝石や鉱物をたくわえる丘、真珠を豊富に作りだす海など、自然の贈り物は至高者の命令によって供給されるものであり、物質自然界は主が望むとおりにさまざまな贈り物を豊富に作りだし、またときにはその供給

を制限します。物質自然界を支配しようとする搾取的な動機に心を奪われることなく、自然界が作りだす神聖な贈り物を活用すれば、人類は満ちたりた生活を満喫できます。それが自然の法則なのです。気まぐれな快楽を求めて物質自然界を搾取しようとするほど、私たちは搾取の反動にしばられます。十分な穀物、くだもの、野菜、薬草があれば、屠殺場を作って哀れな動物たちを殺す必要はありません。食糧となる穀物や野菜が豊富にあれば、動物を殺さなくてもいいのです。川が土地を肥沃にし、ありあまるほどの恵みが私たちに授けられます。鉱物は丘から作られ、宝石は海で作られます。十分な穀物、鉱物、宝石、水、ミルクに恵まれれば、不運な人たちの労力を犠牲にして恐ろしい工業施設を追い求める必要はありません。しかし、このような自然の贈り物はすべて主の慈悲にかかっています。ですから、私たちは主の法則に対する従順な心を持たなくてはなりませんし、その心で献愛奉仕をすれば人間生活は完成します。クンティ女王の言葉は核心についています。女王の望みは、神の慈悲が人類にそそがれ、そのことで自然の繁栄が主の恩寵によって維持されることにあります。

第 4 1 節

अथ विश्वेश विश्वात्मन् विश्वमूर्ते स्वकेषु मे ।
स्नेहपाशमिमं छिन्धि दृढं पाण्डुषु वृष्णिषु ॥ ४१ ॥

アタハ ヴィシュヴェーシャ ヴィシュヴァートウマン
atha viśveśa viśvātman

ヴィシュヴァ・ムールター スヴァケーシュ メー
viśva-mūrte svakeṣu me

スネーハ・パーシャンム イマンム チンディ
sneha-pāśam imam chindhi

ドゥリダハンム パーンドウシュ ヴリシュニシュ
dr̥ḍham pāṇḍuṣu vṛṣṇiṣu

atha—ですから; *viśva-īśa*—おお宇宙の主よ; *viśva-ātman*—おお宇宙の魂よ; *viśva-mūrte*—宇宙体の人物よ; *svakeṣu*—私の親族に対する; *me*—私の; *sneha-pāśam*—愛着の絆; *imam*—この; *chindhi*—切断する; *dr̥ḍham*—深い; *pāṇḍuṣu*—パーンダヴァ家に対する; *vṛṣṇiṣu*—ヴリシュニ家に対しても。

おお、宇宙の主よ、宇宙の魂よ、宇宙の姿の権化よ。ですから、どうか私の親族であるパーンダヴァ家とヴリシュニ家への愛情の絆を切断してください。

要旨解説

純粋な献愛者は、主にむかって個人的なことで願い事をするのを恥ずかしく思います。それでも、世帯者は恩寵を求めずにはいられないことがあります。家族への愛情という絆に縛られているからです。シュリーマティー・クンティーデーヴィーはそのことに気づいていましたから、主に、パーダンヴァ家とヴリシュニ家という親族に対する愛着という結び目を切断してくれるよう祈っています。パーンダヴァ家は自分の実の子どもたち、そしてヴリシュニ家は父方の家族です。クリシュナは両方の家族と等しく関係がありました。双方とも主に依存している献愛者たちですから、主の助けが必要でした。クンティーデーヴィーは、シュリー・クリシュナがパーンダヴァ兄弟という自分の息子たちといっしょにいてほしいと願いましたが、主がそうすれば、父方の家族は恩恵が授かれません。このような親の欲目がクンティーの心を悩ませ、そのために愛情の絆が切断されるよう望んだのでした。

純粋な献愛者は、家族への愛情という束縛の結び目を切断し、すべてを忘れ去った魂たちのために、自分の献愛奉仕の範囲を広めたいと考えます。その模範ともいえる例が、主チャイタンニヤの道に従った6人のゴースヴァーミーたちです。6人とも、博識で教養ある上流階級の裕福な家庭に育ちましたが、一般大衆の幸せのために快適な家庭を離れ、修行僧になりました。家族への愛着を断てば、活動の範囲が広がります。そうしなければ、ブラーフマナ、王、人々の指導者、あるいは主の献愛者にはなれません。人格主神は、理想的な王となってこの模範をしめしています。主シュリー・ラーマチャンドラです。主は理想的な王の気質をしめすために、愛する妻への思いを断ちきりました。

ブラーフマナ、献愛者、王、あるいは国民の指導者たちは、自分の義務を履行するにあたって、広い心を持たなくてはなりません。シュリーマティー・クンティーデーヴィーは、この事実を、そして自分の弱さをも知っていたので、家族への愛着という束縛から解放されるよう祈りました。主はこの節で「宇宙の主、宇宙の心の主」と呼びかけられていますが、それは家族への愛着という堅い絆を切断できる主の絶大な能力をしめしています。ですから主は、弱い献愛者を特に気づかっているのです。全能の力をとおして、その献愛者が感じている家族への愛情を強制的に切断することがあります。主に完全に身をゆだね、そして神のもとに帰る道をはっきりと見いだせるように。

第42節

त्वयि मेऽनन्यविषया मतिर्मधुपतेऽसकृत् ।
रतिमुद्धहतादद्वा ग्रीवौघमुदन्वति ॥ ४२ ॥

トゥヴァイ メー ナニヤ・ヴィシャヤー
tvayi me 'nanya-viṣayā

マティル マドゥ・パテー サクリトゥ
matir madhu-pate 'sakṛt

ラティンム ウドゥヴァハタードゥ アッダハー
ratim udvahatād addhā

ガンゲーヴァウガハム ウダンヴァティ
gaṅgevaugham udanvati

tvayi—あなたに；*me*—私の；*ananya-viṣayā*—穢れのない；*matih*—注意；*madhu-pate*—おお、マドゥの主よ；*asakṛt*—つねに；*ratim*—魅力；*udvahatāt*—あふれますよう；*addhā*—直接に；*gaṅgā*—ガンジス川；*iva*—のように；*ogham*—流れる；*udanvati*—海に向かって。

おお、マドゥの主よ。ガンジス川がよどみなく海に向かって流れるように、私の注意が、他のだれにでもなく、あなたに向けられますように。

要旨解説

全身全霊をこめて主に仕えるとき、愛情のこもった純粋な奉仕が達成されます。さまざまな愛情の絆を切斷する、といっても、だれかに対する「愛着」といった細やかな部分を捨てるわけではありません。それはぜったいにできない。どんな生命体でも、だれかに心を寄せる感情を持っているのです。それこそ生きている証なのですから。命の兆候、たとえば望み、怒り、渴望、魅力を感じる心などは、消せるわけがありません。心を寄せる対象さえ変えればいいのです。望みをなくすことはできません、しかしその望みは、自分の感覚を満たすためではなく、主への奉仕だけに向ければ変わります。家族、社会、国などに対する愛着の中味は、じつは自分の感覚を満たそうとするさまざまな望みの寄せ集めです。この望みが、主を満足させたいという思いに変われば、献愛奉仕になります。

アルジュナは兄弟や親族と戦いたくなかったのですが、その本音はひとつ、「自分の望みを満たしたい」という思いでした。しかし、主の『バガヴァッド・ギーター』という教えを聞いたあと、考えをひるがえして主に仕えました。主の教えに従ったからこそ、アルジュナは名高い献愛者となりました。アルジュナはすべての経典で、主に友人として仕えた結果、精神的完成に到達したと宣言されています。戦いが繰りひろげられ、友同士の会話があり、そこにアルジュナとクリシュナがいた——そんな状況を経て、アルジュナはクリシュナに仕えることで変貌しました。ですから、クンティーの祈りにも、することを変えさえすればいい、という考えが含まれています。ほかごとはいっさい考えずに主に仕えたい、という思いが祈りの言葉になったのです。この穢れのない奉仕が人生の究極目標です。私たちの関心は、とかく不信心で主の望みに合致していないものに向けられています。その関心が主への奉仕に向けられたら、つまり、主に仕えることで感覚が清められたら、

それが純粋な献愛奉仕と呼ばれます。シュリーマティー・クンティーデーヴィーはその完成の境地を求めて主に祈っています。

パーンダヴァ家やヴリシュニ家の人々に対する愛着は、献愛奉仕に反する感情ではありません——主への奉仕と献愛者への奉仕は同じだからです。ときには、主に仕えるよりも献愛者に仕えるほうが価値ある奉仕だったりします。しかしこの節にあるクンティーデーヴィーのパーンダヴァ家とヴリシュニ家への愛着は、家族関係にもとづいています。物質的關係にもとづいた愛情の絆はマーヤーです。体や心にもとづく関係は、外的勢力が作りだしているからです。魂との関係、それも至高の魂と関連して築かれているのが真実の絆です。クンティーデーヴィーは家族との絆を断ちきりたいと思いましたが、それは肌の関係、すなわち血縁関係を断ちきるという意味でした。血縁関係に執着すれば束縛されますが、魂の関係は自由をもたらします。魂と魂の関係は超靈魂をとおして築くことができます。暗闇のなかではなにも見えません。しかし、太陽の光のなかで見れば、暗闇では見えなかったものがなんでも見えてきます。それが献愛奉仕の道です。

第 4 3 節

श्रीकृष्ण कृष्णसख वृष्ण्यृषभावनिधुग्
 राजन्यवंशदहनानपवर्गवीर्य ।
 गोविन्द गोद्विजसुरार्तिहरावतार
 योगेश्वराखिलगुरो भगवन्नमस्ते ॥ ४३ ॥

シュリー・クリシュナ クリシュナ・サカハ ヴリシュニ・リシャバハーヴァニ・ドウルグ・
śrī-kṛṣṇa kṛṣṇa-sakha vṛṣṇy-ṛṣabhāvani-dhru-g-

ラージャニヤ・ヴァンムシャ・ダハナーナパヴァルガ・ヴィーリヤ
rājanya-vaṁśa-dahanānapavarga-vīrya

ゴヴィンダ ゴー・ドゥヴィジャ・スラールティ・ハラヴァターラ
govinda go-dvija-surārti-harāvatāra

ヨーゲーシュヴァラーキヒラ・グロー バハガヴァン ナマス テー
yogēśvarākhila-guro bhagavan namas te

śrī-kṛṣṇa—おお、クリシュナ; *kṛṣṇa-sakha*—おお、アルジュナの友よ; *vṛṣṇi*—ヴリシュニ家の子孫の; *ṛṣabha*—おお、筆頭者よ; *avani*—地球; *dhruk*—反抗的な; *rājanya-vaṁśa*—王家; *dahana*—おお抹殺者よ; *anapavarga*—～が衰えることなく; *vīrya*—力; *govinda*—おお、ゴーローカダーマの所有者よ; *go*—牛たちの; *dvija*—ブラーフマナたち; *sura*—半神たち; *arti-hara*—苦しみから救うために; *avatāra*—おお、降誕される主よ; *yoga-īśvara*—おお、あらゆる神秘的力の主よ; *akhila*—宇宙の; *guro*—おお、師よ; *bhagavan*—おお、あらゆる富を持つ方よ; *namaḥ te*—あなたに敬意を表します。

おお、クリシュナ。アルジュナの友。ヴリシュニ家の筆頭者よ。あなたは、地球を混乱させている政治集団を壊滅させました。あなたの力は決して衰えません。超越的住居を持ち、牛、ブラーフマナ、献愛者を苦しみから救うために降誕されます。あらゆる神秘的力をそなえ、全宇宙の住民を導く方です。全能の神であるあなたに、私は心からの敬意を表します。

要旨解説

至高主シュリー・クリシュナについて、シュリーマティー・クンティーデーヴィーが要約しています。全能の主は永遠で神々しい住居を持ち、そこでスラビ (surabhi) 牛を飼っています。そして無数の幸運の女神たちの奉仕をうけています。主は献愛者を呼びもどすために、そして管理職を努めているはずの、しかしじつは地球を混乱させている政治家や王たちを抹殺するために物質界に降誕します。主は無尽蔵の力を使って創造・維持・破壊をおこない、つねに力に満ちあふれ、力が衰えることはありません。牛、ブラーフマナ、献愛者は、私たち生命体の幸せにはなくてはならない存在であるため、主はかれらに特別な愛情をそそいでいます。

第 4 4 節

सूत उवाच

पृथयेत्थं कल्पदैः परिणूताखिलोदयः ।

मन्दं जहास वैकुण्ठो मोहयन्निव मायया ॥ ४४ ॥

スータ ウヴァーチャ

sūta uvāca

プリタハイエーツタハンム カラ・パダイヒ

pr̥thayettham̐ kala-padaiḥ

パリーヌターキヒロダヤハ

pariṇūtākḥilodayaḥ

マन्दナム ジャハーサ ヴァイクントホー

mandam̐ jahāsa vaikuṇṭho

モーハヤン- イヴァ マーヤヤー

mohayann iva māyayā

sūtaḥ uvāca—スータが言った; pr̥thayā—プリター (クンティー) によって; ittham—この; kala-padaiḥ—選ばれた言葉で; pariṇūta—崇拜されて; akhila—普遍的な; udayaḥ—栄光; mandam—優しく; jahāsa—微笑んだ; vaikuṇṭhaḥ—主; mohayan—魅力的な; iva—のような; māyayā—主の神秘的力。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「よりすぐられた言葉で主を讃えたクンティーデーヴィーの祈りを聞いたあと、主はやさしくほほえんだ。そのほほえみは、主の神秘的力のように魅力にあふれていた」

要旨解説

私たちが魅了してやまないもの、それはすべて主の現われであると言われていています。物質界を支配しようとしている条件づけられた魂たちも主の神秘的な力に魅了されていますが、献愛者は別の思いで主の栄光に惹きつけられており、主の慈悲心にあふれた祝福はかれらにそそがれています。主の力は多彩な形で表われますが、それは電気が多様な力となって機能しているのと同じです。シュリーマティー・クンティーデーヴィーは、主の栄光の断片を表現するために祈りを捧げました。献愛者たちは、よりすぐった称讃の言葉で主を崇拜します。そのことから、主はウッタマシュローカ (Uttamaśloka) という別名を持っています。どれほど多くの言葉を選んでも主の栄光を語りつくすことはできませんが、それでも主はそのような祈りに満足します。かたことの言葉でほめてくれる我が子を見て喜ぶ父親のようなものです。マーヤー (māyā) には「幻惑と慈悲」というふたつの意味がありますが、この節では、主のクンティーデーヴィーに対する慈悲の意味で使われています。

第 4 5 節

तां बाढमित्युपामन्त्र्य प्रविश्य गजसाह्वयम् ।
स्त्रियश्च स्वपुरं यास्यन् प्रेम्णा राज्ञा निवारितः ॥ ४५ ॥

ターンム バーダハンム イティ ウパーマントウリヤ
tām bāḍham ity upāmantrya

プラヴィッシャ ガジャサーフヴァヤム
praviśya gajasāhvayam

ストウリヤシュ チャ スヴァ・プランム ヤーッシャン
striyaś ca sva-puram yāsyam

プレムナー ラーギヤー ニヴァーリタハ
preṃṇā rājñā nivāritaḥ

tām—それらすべて; *bāḍham*—受け入れた; *iti*—そのように; *upāmantrya*—そのあとに知らせた; *praviśya*—入っていく; *gajasāhvayam*—ハスティナープラの宮殿; *striyaś ca*—他の女性たち; *sva-puram*—自分の住居; *yāsyam*—～に発つとき; *preṃṇā*—愛情とともに; *rājñā*—王によって; *nivāritaḥ*—止められた。

主はシュリーマティー・クンティーデーヴィーの祈りを聞いたあと、ハスティナープラ

の宮殿に入ること、出立の意志を他の女性たちに告げた。しかし、その場を離れようとしたとき、愛情をこめて嘆願するユディシュティラ王に引きとめられた。

要旨解説

主クリシュナがドウヴァーラカーに向かうことを決心したとき、ハスティナープラにいるよう思いとどまらせることはだれにもできませんでしたが、せめてもう数日だけでも、というユディシュティラ王の短い言葉に、主は心を動かされました。これは、主でさえ断わりきれなかったユディシュティラ王の言葉が愛情に支えられていることを如実にしめています。全能の神は愛情をこめた奉仕によって征服されるのであり、それ以外は、なにをもってしても主を征服することはできません。主は思いどおりに行動する方ですが、純粹な献愛者が愛情をこめてなにかを頼めば、すすんで受けいれます。

第46節

व्यासाद्यैरीश्वरेहाज्ञैः कृष्णेनाद्भुतकर्मणा ।
प्रबोधितोऽपीतिहासैर्नाबुध्यत शुचार्पितः ॥ ४६ ॥

ヴァーサーダイヤル イーシュヴァレーハーギヤイヒ
vyāsādyair īśvarehājñaiḥ

クリシュネーナードウプタ・カルマナー
kṛṣṇenādbhuta-karmaṇā

ブラボーディトー पीティハーサイル
prabodhito 'pītiḥāsair

ナーブデヤタ シュチャールピタハ
nābudhyata śucārpitaḥ

vyāsa-ādyaḥ—ヴァーサを筆頭とする偉大な聖者たち; *īśvara*—全能の神; *ihā*—～の意志によって; *jñaiḥ*—博識者によって; *kṛṣṇena*—クリシュナ自身によって; *adbhuta-karmaṇā*—超人間的な活動をする者によって; *prabodhitaḥ*—慰められて; *api*—～ではあるが; *itiḥāsaiḥ*—歴史の証拠によって; *na*—ではない; *abudhyata*—満足した; *śucā arpitah*—苦しんで。

深い悲しみに沈んでいたユディシュティラ王は、ヴァーサを筆頭とする偉大な聖者たちや、超人的偉業をおこなう主クリシュナ自身から教えを授かっても、またあらゆる歴史的証拠をしめされても納得できなかった。

要旨解説

敬虔なユディシュティラ王は、クルクシェートラの戦場での大量殺人が、とくに自分のために引きおこされたことに心を痛めていました。戦争前はドウリョーダナが王座に就き、巧みな政治的手腕を発揮していたことから、その意味では戦争をする必要はなかったのです。しかし、正義の理念からすれば、ドウリョーダナがユディシュティラ王に王座をゆずる状況にありました。政権にかかわる人々の関心がこの点をめぐって火花を散らし、対立する兄弟間で争われたこの戦争に巻きこまれました。主クリシュナもこの抗争に加わり、ユディシュティラ王の側についています。『マハーバーラタ』のアーディ・パルヴァ（第20節）では、クルクシェートラの戦争の18日間に6億4,000万人が殺され、そのほかにも何百何千もの人々が行方不明になったとされるされています。まさにこの戦争は、過去5,000年のあいだで起こった最大規模の戦争だったのです。

マハーラージャ・ユディシュティラを国王にするためだけに引きおこされたこの大量殺人はいたましい悲劇でした。王は、自分が勝者になったこの戦いが正義にもとづくものであることを確信するために、ヴァーサのような偉大な聖者たちや主自身から歴史的証拠を得ようとしていました。しかし、当時もっとも偉大とされていた賢人たちの意見を聞いても納得のいく答は得られませんでした。クリシュナはここで、超人的な偉業を為す人物と呼ばれていますが、王の質問に対しては、主やヴァーサでさえもユディシュティラ王を納得させられませんでした。ということは、その超人的な偉業ができなかった、ということでしょうか。いいえ、もちろん違います。ユディシュティラ王とヴァーサの心にいる超靈魂・イーシュヴァラ (īśvara) として主がさらに超人的なことをした、しかも主がそのことを望んだから——じつは、背後にそういう経緯があったのです。主はユディシュティラ王の超靈魂として、王がヴァーサや他の聖者たち、そして主自身の言葉にさえ納得できないよう仕向けました。それは、もうひとりの偉大な献愛者で、臨終の床にあったビーシュマデーヴァから教えるを聞いてほしいと主が考えていたからです。主は、偉大な兵士ビーシュマデーヴァが物質界を去る直前に自分と会い、そして愛する孫であるユディシュティラ王たちが王座についている様子を見ながら、静かに息をひきとることを願ったのでした。ビーシュマデーヴァはパンドヴァ兄弟と戦うつもりはつゆほどもありませんでした。父親を失った愛しい孫たちと、どうして剣をまじえることなどできません。しかし、クシャトリーヤは何事にも徹底した人々であり、またドウリョーダナに生計をゆだねていた立場上、心ならずもドウリョーダナ側につかなくてはなりません。また主は、ユディシュティラ王がビーシュマデーヴァの言葉に慰められ、そのことで世界中の人々が、主自身も含めて、ビーシュマデーヴァがあらゆる知識に卓越していたことを知ることができる、ということも望んでいたのです。

第47節

आह राजा धर्मसुतश्चिन्तयन् सुहृदां वधम् ।
प्राकृतेनात्मना विप्राः स्नेहमोहवशं गतः ॥ ४७ ॥

アーハ ラージャー ダハルマ・スタシュ
āha rājā dharma-sutaś

チンタヤン スフリダーンム ヴァダハンム
cintayan suhṛdām vadham

プラークリテーナートウマナー ヴィプラーハ
prākṛtenātmanā viprāḥ

スネーハ・モーハ・ヴァシャンム ガタハ
sneha-moha-vaśam gataḥ

āha—言った; *rājā*—ユディシュティラ王; *dharma-sutaḥ*—ダルマ (ヤマラージャ) の子; *cintayan*—～のことを考えている; *suhṛdām*—友人たちの; *vadham*—殺害; *prākṛtena*—物質的概念だけによって; *ātmanā*—自己によって; *viprāḥ*—おお、ブラーフマナよ; *sneha*—愛着; *moha*—惑い; *vaśam*—～に流されて; *gataḥ*—行ってしまった。

ダルマの子ユディシュティラ王は友人たちの死に打ちひしがれ、どこにでもいる俗人のように悲嘆にくれていた。聖者たちよ。そのような愛着ゆえに理性を失っていた王が口を開いた。

要旨解説

ユディシュティラ王が俗人のように嘆くことは思いもよらないでことでしたが、主の意志が背後にあり、俗世間の愛着によって惑わされましたのでした (アルジュナも同じように惑わされています)。物事を正しく見る人は、生命体は肉体でも心でもなく、物質的概念を超越していることをよく知っています。一般の人は、暴力や非暴力を肉体に結びつけて考えますが、それは幻惑です。だれでも自分に定められた義務を遂行しなくてはなりません。クシャトリヤは、正義のためなら相手がだれであろうと戦います。その義務を遂行するとき、魂を包む衣服にすぎない肉体が消滅することについて心乱されるべきではありません。それはユディシュティラ王にも百も承知のことでしたが、主の意志によって、俗人と同じ心境に陥りました。王が眩惑した背後には主の崇高な計画がありました。アルジュナが主クリシュナから教えを授かったように、今度はユディシュティラ王がビーシュマから教えを授かる番だったのです。

第 4 8 節

अहो मे पश्यताज्ञानं हृदि रूढं दुरात्मनः ।
पारक्यस्यैव देहस्य बह्व्यो मेऽक्षौहिणीर्हताः ॥ ४८ ॥

アホー メー パッシャターギャーナンム
aho me paśyatajñānam

フリディ ルーダハンム ドウラートウマナハ
hṛdi rūḍham durātmanaḥ

パーラキヤッシャイヴァ デーハッシャ
pārakyasyaiva dehasya

バフヴョー メー クシャウヒニール ハターハ
bahvyo me 'kṣauhiṇīr hatāḥ

aho—おお; *me*—私の; *paśyata*—見よ; *ajñānam*—無知; *hṛdi*—心のなか; *rūḍham*—
〜に置かれて; *durātmanaḥ*—罪人の; *pārakyasya*—他人のためにある; *eva*—確かに;
dehasya—肉体の; *bahvyaḥ*—数多くの; *me*—私によって; *akṣauhiṇīḥ*—軍隊の集まり;
hatāḥ—殺した。

ユディシュティラ王が言った。「ああ、私ほど罪な男がいるだろうか！ 私の心を見よ、
無知にむしばまれたこの心を！ 人のためにあるはずのこの肉体が、無数の師団に配属さ
れていた兵士たちを殺してしまったのだ」

要旨解説

1 個師団をアクシャウヒニー (*akṣauhiṇī*) といい、21,870台の戦闘馬車、21,870頭の
象、109,650人の歩兵、65,600の騎兵隊の陣構えになっています。クルクシェートラの戦
場では、数知れないほどのアクシャウヒニーが壊滅しました。世界を治めるもっとも敬虔
な王だったマハーラージャ・ユディシュティラは、これほど多くの生命体が戦場で散った
責任は自分にあると思っていました。自分を王座に就かせるための戦争だったからです。
肉体は人のためにあります。命が宿っているうちは人の役に立つために、死んでしまえば
犬やジャッカルやウジ虫たちの腹を満たすためにあります。そんなはかない肉体のために
大量虐殺が引き起こされたことで、王は深い悲しみに沈んでいます。

第 4 9 節

बालद्विजसुहृन्मित्रपितृभ्रातृगुरुद्रुहः ।
न मे स्यान्निरयान्मोक्षो ह्यपि वर्षायुतायुतैः ॥ ४९ ॥

バーラ・ドウヴィジャ・スフリン・ミトウラ・
bāla-dviḥja-suhṛn-mitra-

ピトゥリ・ブフラートウリ・グル・ドウルハハ
pitṛ-bhrāṭṛ-guru-druhaḥ

ナ メー シャーン ニラヤーン モークショー
na me syān nirayān mokṣo

ヒ アピ ヴァルシャーユターユタイヒ
hi aṇi varṣāyutāyutaiḥ

bāla—少年たち; *dvi-ja*—再誕者; *suhṛt*—好意を寄せる人々; *mitra*—友人たち; *pitṛ*—両親たち; *bhrāṭṛ*—兄弟たち; *guru*—教師たち; *druhaḥ*—殺した者; *na*—決してない; *me*—私の; *syāt*—〜であろう; *nirayāt*—地獄から; *mokṣaḥ*—解放; *hi*—確かに; *aṇi*—であるけれども; *varṣa*—何年も; *ayuta*—何百万; *āyutaiḥ*—加えられて。

私は多くの少年、ブラーフマナ、私が好意を寄せる人々、友人、両親、教師、兄弟たちを殺してしまった。たとえこれから何百万年生きようとも、大罪を犯した私は、決して無間地獄から解放されることはない。

要旨解説

戦争がひとたび起これば、かならずといってよいほど少年、ブラーフマナ、女性など、無実の人々が大量に殺害され、それは大きな罪であると考えられています。悪事を働いたわけでは人々ですから、経典は、いかなる場合でもそのような人々の殺害は禁じられています。マハーラージャ・ユディシュティラはこのような大量殺人についてすでに知っていましたし、この戦いでも、友人、両親、教師などが両軍に参加し、全員が戦死しています。現実に大量殺戮が起こったことは、王にとって考えるだけでも空恐ろしいことであり、そのため、これから何百万年何億年ものあいだ地獄に住みつづけることを覚悟していました。

第50節

नैनो राज्ञः प्रजाभर्तुर्धर्मयुद्धे वधो द्विषाम् ।
इति मे न तु बोधाय कल्पते शासनं वचः ॥ ५० ॥

ナイノー ラーギヤハ プラジャー・バハルトウル
naino rājñāḥ prajā-bhartur

ダハルマ・ユッデヘー ヴアドホー ドウヴィシャーンム
dharma-yuddhe vadho dviṣām

イティ メー ナ トウ ボーダハーヤ
iti me na tu bodhāya

カルパテー シャーサナンム ヴァチャハ
kalpate śāsanam vacaḥ

na—決してない; enaḥ—罪; rājñah—王の; prajā-bhartuḥ—市民を維持することに従事している者の; dharma—正しい理由のために; yuddhe—戦いで; vadhaḥ—殺している; dviṣām—敵の; iti—これらすべて; me—私にとって; na—決してない; tu—しかし; bodhāya—満足のために; kalpate—彼らは管理のためにある; śāsanam—教え; vacaḥ—の言葉。

市民を養うために力をつくし、正義にもとづいて天誅を加える王は罪をこうむることはない。しかし、その教えは私にあてはまらない。

要旨解説

ドゥリョーダナは市民を苦しめることなく巧みに国を収め、自分もその統治に関与していなかった、ところが自分はドゥリョーダナから王国を奪いかえすという私利私欲のために数多くの命を奪ってしまった、と考えました。統治のためではなく権力の増大のための殺戮だったため、罰させられるのは自分だ、と王は考えたのです。

第51節

स्त्रीणां मद्वतबन्धूनां द्रोहो योऽसाविहोत्थितः ।
कर्मभिर्गृहमेधीयैर्नाहं कल्पो व्यपोहितुम् ॥ ५१ ॥

ストウリーナーナム マドゥ・ダハタ・バンドフナーナム
strīṇām mad-dhata-bandhūnām

ドゥローホー ヨー サーヴ イホーツティタハ
droho yo 'sāv ihotthitaḥ

カルマビヒル グリハメーディーヤイル
karmabhir gṛhamedhīyair

ナーハンム カルポー ヴャポーヒトゥナム
nāham kalpo vyapohitum

strīṇām—女性たちの; mat—私によって; hata-bandhūnām—殺された友人たちの; drohaḥ—敵意; yaḥ—それ; asau—それらすべて; iha—これと共に; utthitaḥ—生じた; karmabhiḥ—活動の力で; gṛhamedhīyaiḥ—物質的な福祉活動をしている人々によって; na—決してない; aham—私は; kalpaḥ—期待できる; vyapohitum—同じことを元に戻す。

女性たちの友を数多く殺害した私の悪行は、人々の心に根深い怨念を作りあげてしまっ

た。どれほど福利活動をして、その憎しみが消えることはないだろう。

要旨解説

グリハメーディー (grhamedhī) とは、物質的繁栄のために福利活動をすることだけに働いている人たちのことです。物質的繁栄は、罪な活動が災いして達成されないことがあります。物質主義者は、物質的な義務をはたしているとき、意識していなくても罪を犯してしまうからです。その罪の反動に巻きこまれないよう、ヴェーダは数種類の儀式をするよう勧めています。ヴェーダには、「アシュヴァメーダ・ヤギヤ (Aśvamedha-yajña 馬のいけにえの儀式) をすればブラフマ・ハテヤー (brahma-hatyā ブラフマナの殺害) からさえ救われる」とあります。

ユディシュティラ・マハーラージャはこのアシュヴァメーダ・ヤギヤをおこないましたが、ヤギヤをしても犯してしまった罪を償うことはできない、と考えました。ひとたび戦争になれば、夫や兄弟、あるいは父親や息子たちでさえ戦いに駆りだされます。かれらの死によって新たな憎しみが作りだされ、やがて活動と反動の悪循環が広がり、それはアシュヴァメーダ・ヤギヤを何千回おこなっても相殺することはできません。

行動(カルマ)はそのように発生するものです。カルマは活動と反動を同時に発生させ、結果として物質的活動に拍車をかけ、活動する人をがんじがらめに縛りつけていきます。『バガヴァッド・ギーター』(第9章・第27-28)にはその治療法がしめされており、活動によって生じる動・反動は、その活動が至高主のためであれば止めることができる、とあります。クルクシェートラの戦いの真因は至高主シュリー・クリシュナの意志であり、それは主の説明で明白ですし、主が望んだからこそユディシュティラ王はハスティナープラの王座に就きました。ですから、パンドヴァ兄弟側に落ち度はありません。主の命令を実行していたにすぎません。そうではなく、我欲だけで戦争を起こす者は、その結果をみずから償わなくてはなりません。

第52節

यथा पङ्केन पङ्काम्भः सुरया वा सुराकृतम् ।
भूतहत्यां तथैवैकां न यज्ञैर्माष्टुर्महति ॥ ५२ ॥

ヤタハー パンケーナ パンカーンムバハハ
yathā paṅkena paṅkāmbhaḥ

スラヤー ヴァー スラークリタム
surayā vā surākṛtam

ブフータ・ハテヤーンム タタハイヴァイカーンム
bhūta-hatyāṁ tathaivaikāṁ

ナ ヤギヤイル マールシュトウンム アルハティ
na yajñair mārṣtum arhati

yathā—〜と同じように; pañkena—泥で; pañka-ambhaḥ—泥と混ざった水; surayā—酒によって; vā—どちらも; surākṛtam—わずかな酒が触れたことが原因で穢れたこと; bhūta-hatyām—動物を殺すこと; tathā—そのようなこと; eva—確かに; ekām—一つ; na—決してない; yajñaiḥ—定められた儀式によって; mārṣtum—中和させること; arhati—〜は価値がある。

泥水から泥を濾過することができないように、あるいは酒の入っていた容器を浄化することができないように、儀式で動物をいけにえにしても人々を殺す罪は相殺できるものではない。

要旨解説

馬や牡牛がいけにえにされるアシュヴァメーダ・ヤギヤあるいはゴーメーダ・ヤギヤ (Gomedha-yajña) は、もちろん、動物を殺すために定められているものではありません。主チャイタンニャは、ヤギヤの祭壇でいけにえにされる動物たちは、若返り、そして新しい次の生涯が与えられる、と言っています。ヴェーダのマントラの効果を証明するためにおこなわれたのです。ヴェーダのマントラを正しく唱えれば、執行者は罪の反動から救われますが、未熟な指導のもとで不正におこなわれると、まちががなく、その動物のいけにえの責任を取らなくてはなりません。争いと偽善の現代では、ヤギヤを正しく執行できる熟達したブラーフマナがないため、儀式を完璧におこなうことはできません。これは、マハーラージャ・ユディシュティラの言葉が、カリ時代の儀式を暗にしめているということです。カリ・ユガに勧められている唯一の儀式は、主シュリー・チャイタンニャ・マハープラブが始めたハリ・ナーマ・ヤギヤ (hari-nāma-yajña) です。しかし、ハリ・ナーマのヤギヤを口実にして動物の殺害にふけり、罪を相殺しようなどと考えることはありません。献愛者は自分の物欲だけで動物を殺すことはしませんし、また（主がアルジュナに命じたように）クシャトリヤとしての義務遂行を放棄することもあります。すべてが主の意志のためになされたときに目的はことごとく達成されます。そして、それは献愛者にしかできないことです。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第8章、「クンティー女王の祈り、そしてパリークシットの救い」の要旨解説を終了します。